
日本地球化学会ニュース

No .166

2001 .8 20

主な記事

●学会記事

- 2000年度日本地球化学会年会の最終案内及びプログラム
- 訃報：野口喜三雄 名誉会員
- 「鳥居基金」助成実施報告
- 評議員会，各委員会，研連議事録

●その他の研究助成，学会，シンポジウム等の各種情報のお知らせ

同位体地球化学ショートコースのお知らせ

- 猿橋賞，沖縄賞，笹川科学研究助成，シンポジウム，講演会，人事公募など

●編集後記

現在，日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village の中で公開しております。URL アドレスは，
<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html> です。

シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新していますのでご覧ください。

ご覧の上，ご意見，ご要望をお寄せください。みなさまのご協力で，より魅力的でアップデートなものにしていきたいと思っています。

2001年度日本地球化学会年会の最終ご案内

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会

会期：2001年10月18日(木)～10月20日(土)

会場：学習院創立百周年記念会館（豊島区目白 学習院構内）

内容：一般講演：討論を含めて15分

ポスターセッション：コアタイム 10月19日(金)
12：30～14：00ポスターパネルは縦180 cm×横90 cmです。ポスターセッションは記念会館1階のホワイトエで行います。ポスターは当日午前中に掲示していただき、10月20日(土)の正午までに撤去していただきます。掲示用のピンは会場受付に用意いたします。

特別セッション：10月18日(木) 13：00～17：50まで。「21世紀の地球化学 同位体地球化学の新しい方向を探る」としてA会場（正堂）にて、国外および国内の研究者の招待講演。特別セッションは会員、学生、非会員を問わず無料です。会員外の多くの研究者の参加を希望します。多くの方々へ、お知らせ下されると幸いです。特別セッションの講演要旨は、講演要旨集にも綴じ込みますが、別に、簡単なパンフレットも用意する予定です。

総会および学会賞受賞式：10月19日(金) 14：00～A会場（正堂）

学会賞受賞講演：10月19日(金) 15：30～A会場（正堂）

懇親会：10月19日(金) 18：00～B会場（二階小講堂）。会費は6,000円です。

参加費：9月14日までに支払われた場合は、要旨集込みで、会員は4,000円、学生は2,000円です。非会員は5,000円です。（ただし、予約された場合のみ送料を含みます。）その後は、会員は5,000円、学生は3,000円となります。

要旨集：3,000円（送料込み）

参加申し込み締め切り：2001年9月14日(金)

参加申し込み方法：ホームページ上からの受付に限らせていただきます。ホームページ（<http://gsj.gakushuin.ac.jp/>）の所定の書式に従って送信して下さい。ホームページでの受付は8月初旬から行っております。ホームページからの送信は、設定等に問題等がありますと受け付けられない場合があります。締切り当日にトラブルが重なりますと、対処が遅れるおそれがあります。出来るだけお早めにお申し込み下さい。

送金方法：参加費、懇親会費等は9月14日(金)までに下記の郵便振替の口座宛にご送金下さい。通信欄に送金内容をご面倒でもお書き下さい。郵便振替受領書をもって領収書に代えさせていただきます。別途、領収書が必要な方は、年会当日受付にお申し出ください。

郵便振替口座番号：00100 4 30248 日本地球化学会2001年会実行委員会

宿泊：ホームページ上で、目白と池袋のいくつかのホテルをご案内しております。10月中旬はホテルが混み合います。各自、お早めに御手配下さい。

不明な点、ホームページにアクセスできないこと等がございましたら、御遠慮なく、御面倒でも本実行委員会にお問い合わせ下さい。

問合先：

〒171 8588 東京都豊島区目白1 5 1

学習院大学理学部内

日本地球化学会2001年会実行委員会

長澤 宏、垣内 正久

Tel：03 3986 0221、内線6477、6507、6516

Fax：03 5992 1029

E-mail：620084@Gakushuin.ac.jp

860018@Gakushuin.ac.jp

2001年日本地球化学会年会タイムテーブル

10月18日(木)

9:30

13:00

18:00

A会場	海洋		特別セッション	
B会場	岩石			夜間集会
C会場	物質循環・地球化学的プロセス			
D会場	大気			

10月19日(金)

8:45

12:30 14:00

18:00

A会場	海洋			総会・受賞講演	
B会場	地球外物質				懇親会
C会場	元素・同位体の分配・拡散				
D会場	エアロゾル・黄砂、降水				
ポスタ ー会場			コアタイム		

10月20日(土)

9:00

13:00

A会場	生物・有機物、堆積物		堆積物・古環境
C会場	陸水、自然災害の予知		熱水、環境
D会場	岩石・地殻		岩石・地殻

A会場：正堂（1階）

B会場：小講堂（3階）

C会場：第1・2会議室（3階）

D会場：第4会議室（4階）

[特別セッション] 「21世紀の地球化学——同位体地球化学の新しい方向を探る……」

10月18日(水) 午後1時より (一般公開)

(13:00-14:45) 座長 垣内 正久 (学習院大・理)

「本セッションを始めるに当たって」 垣内 正久 (学習院大・理)

「同位体効果——化学者の視点から——」 (“Isotope Effect and Isotope Fractionation”)

石田 孝信 (ニューヨーク州立大学)

「20世紀の地球化学と21世紀の地球化学」 (“Isotope Geochemistry: This is the place to create your future”) 平田 岳史 (東工大・地惑)

(15:00-17:50) 座長 松久 幸敬 (日本地球化学会会長・産総研)

“New Directions in Isotope Geochemistry” Keith O’Nions (Oxford Univ. Earth. Sci.)

“Implications of mass-dependent sulfur isotope compositions for the study of the Early Earth”

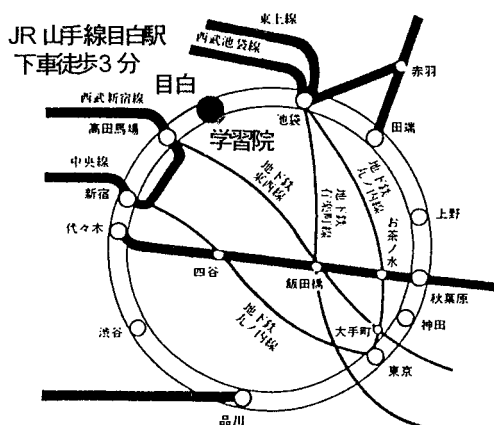
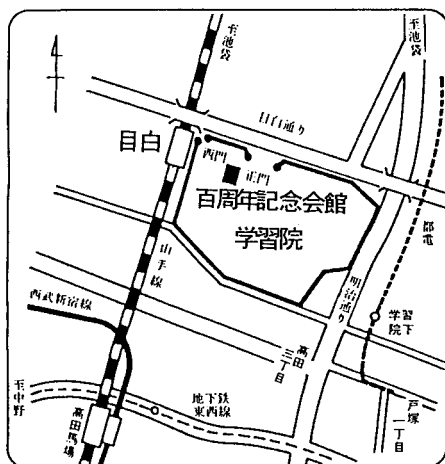
James Farquhar (Univ. Maryland)

“The mystery of meteoritic oxygen isotopes” Robert N. Clayton (Univ. Chicago, Enrico Fermi Inst.)

“Closing speech of this session” Yukihiro Matsuhisa (President, Geochem. Soc. Japan)

(このセッションは、一般に無料で公開します。興味をお持ちの方によりしくお伝えをお願いします。)

● 交通案内



2001年度日本地球化学会年会プログラム

第1日(10月18日)午前

【A会場】

一般講演【海洋】

- (9:30~12:00) 座長:天川裕史・乗木新一郎
- 1 A 01 河川経由指標化合物の相模湾深層への輸送
(東京農工大農) 真名垣聡・高田秀重
- 1 A 02 東京湾において, 1999, 2000年冬季に見られた沈降粒子束の増大(¹北大院地球環境・²名大・³九大)乗木新一郎¹・高橋伸元¹・才野敏郎²・柳哲雄³
- 1 A 03 相模湾における沈降粒子中の鉛210とその高い捕獲効率について(¹東海大海洋・²北大低温研・³名大院環境・⁴京大臨海実験・⁵東大海洋研・⁶静岡大) 加藤義久¹・中塚武²・増澤敏行³・白山義久⁴・嶋永元裕⁵・北里洋⁶
- 1 A 04 四国海盆中央部における春季ブルームによる生物源物質の鉛直輸送(¹名大院環境・²名大院理・³名大地球水循環・⁴京大原子炉) 増澤敏行¹・李鉄²・北川浩之¹・段芸²・山本みね子³・日比由利子¹・高田實彌⁴
- 1 A 05 西部北太平洋のアルケノンフラックスと不飽和指標(¹北大院地球環境・²都立大化学・³関西総合環境センター・⁴産総研) 山本正伸¹・奈良岡浩²・嶋本晶文³・福原達雄³・田中裕一郎⁴・西村昭⁴
- 1 A 06 西部北太平洋における生物起源粒子フラックスの季節変動(北大院地球環境)乗木新一郎・前田巨宏
- 1 A 07 日本海における沈降粒子束:特に季節変動について(¹北大院地球環境・²原研)乗木新一郎¹・相澤晃¹・乙坂重嘉²
- 1 A 08 日本海, オホーツク海におけるアルミニウム(電中研) 下島公紀
- 1 A 09 日本海及びオホーツク海における微量金属元素の分布とその特徴(¹東大海洋研・²滋賀県立大環境) 小畑元¹・野崎義行¹・ディア・ソット・アリボ¹・丸尾雅啓²・中山英一郎²
- 1 A 10 北太平洋の表面海水のCe, Nd同位体比(東大海洋研) 天川裕史・野崎義行

【B会場】

一般講演【微量元素・同位体地球化学】

- (9:30~12:00) 座長:鍵裕之・太田充恒
- 1 B 01 地下深部の花崗岩の水 岩石反応に伴う希土類元素の挙動(¹広島大院理・²サイクル機構) 酒見泰¹・高橋嘉夫¹・濱克宏²・天野健治²・清水洋¹
- 1 B 02 ECR イオン源と重イオン線形加速器を用いた微量元素質量分析法の開発(理研) 高橋和也・榎本秀一・大山拓也・蛭沼利江子・木寺正憲・中川孝秀・上垣外修一・池沢英二・藤巻正樹・矢野安重
- 1 B 03 中国産ホウ素鉱物のホウ素同位体組成(¹上智大理工・²東工大原子炉・³中国地質大) 山比羅守¹・木川田喜一¹・大井隆夫¹・野村雅夫²・Xiao Rongge³・Cai Keqin³
- 1 B 04 タクラマカン砂漠周辺に分布する氷河堆積物の同位体的及び地球化学的特徴 タクラマカン砂漠砂と中国黄土の起源物質について(¹広島大院理・²理研) 常青¹・清水洋¹・高橋嘉夫¹・矢吹貞代²
- 1 B 05 Os同位体組成を用いたタクラマカン砂漠周辺での風成堆積物の移動についての研究(¹北大院理・²海技セ・³京大院理) 服部雄次¹・本多将俊²・鈴木勝彦³・清水洋¹
- 1 B 06 Leedey コンドライト中のREEパターンの収束性と鏡像性(¹東大理・²三菱マテリアル) 増田彰正¹・川上紀²
- 1 B 07 広域X線吸収微細構造(EXAFS)からみた合成カルサイト中に取り込まれた微量希土類元素周辺の構造(¹産総研・²東大院理・³広大院理・⁴東京農工大農・⁵高工ネ研) 津野宏¹・鍵裕之²・高橋嘉夫³・赤木右⁴・野村昌治⁵
- 1 B 08 炭酸カルシウムの溶解速度に及ぼす微量希土類元素の影響 原子間力顕微鏡を用いたその場観察(東大院理) 神谷奈津美・鍵裕之
- 1 B 09 線照射による岩石 水反応における元素溶出パターンの変化(名大院環境) 柴田信之介・田中剛・山本鋼志
- 1 B 10 西オーストラリア Pilbara 地域の先カンブリア紀 chert, spinifex-textured basalt の Re-Os 及び Sm-Nd 同位体システムティクス(¹京大院理・²広大院理・³名大院地球環境・

¹産総研・⁵IFREE, JAMSTEC・⁶名大博物館) 鈴木勝彦¹・清水洋²・岡元正久²・服部雄次²・南雅代³・下田玄⁴・巽好幸⁵・足立守⁶

【C会場】

一般講演 [物質循環・地球化学的プロセス]

(9:30~11:45) 座長: 鹿園直建・村松康行

- 1 C 01 不活性気体とメタンの炭素同位体比に基づく低温熱分解起源の天然ガスの研究 (¹秋田大工学資源・²環境科学技術研) 北逸郎¹・長谷川英尚²・神谷千紗子¹
- 1 C 02 北太平洋表層堆積物の Hf-Nd 同位体組成の分布 (¹名大院環境・²Institute for Isotope・³産総研) 浅原良浩^{1,2}・李徳春²・Martin Frank²・Tina van deFliert²・Alex N. Halliday²・西村昭³
- 1 C 03 酸性赤色土と溶液系の相互作用 (琉球大理) Said Ali Vuai¹・渡久山章
- 1 C 04 新生代後期におけるグローバル Sr サイクルとその影響 (慶大院理工) 柏木洋彦・鹿園直建
- 1 C 05 沖縄島に産する泥灰岩の溶出および風化に関する研究 (琉球大理) 前川孝紀・渡久山章
- 1 C 06 Cl, D, ¹⁸O 系の簡易シミュレーション解析による秋田県八橋油田の地層水起源の再検討 (産総研地質調査総合センター) 茂野博
- 1 C 07 伊豆小笠原弧の希ガス同位体組成にみられるフィリピン海プレートの沈みこみの影響 (東大地殻化学) 清水綾・長尾敬介・野津憲治
- 1 C 08 石灰岩地帯における CO₂ のグローバルフラックス (¹九大院理・²都立大理・³鹿児島大・⁴嶺九電産業・⁵九州環境管理協会) 向陽子¹・浦田健作²・井倉洋二³・能登征美⁴・川村秀久⁵・吉村和久¹
- 1 C 09 I 129 を用いた年代測定: ヨウ素の地球化学的循環を探る指標として (¹放医研・²University of Rochester) 村松康行¹・U. Fehn²・吉田聡¹

【D会場】

一般講演 [大気]

(9:30~12:15) 座長: 松枝秀和・植松光夫

- 1 D 01 安定同位体比指標を用いた土壌ガス中における一酸化炭素について (¹北大院理・²東工大

院総合理工・³科学技術振興事業団) 小松大祐¹・角旨潤¹・中川書子^{2,3}・蒲生俊敬¹

- 1 D 02 利尻島において観測された APAN の発生源の可能性 (¹国環研・²科学技術振興事業団・³地球フロンティア) 谷本浩志¹・加藤俊吾²・秋元肇³
- 1 D 03 名古屋大学内の松葉に見られる都市大気中二酸化炭素の¹⁴C濃度の経年変化 (名大年代測定センター) 中村俊夫・丹生越子・太田友子・小田寛貴
- 1 D 04 N₂O の光酸化反応におけるアイソトポマー分別 (¹東工大院総理工・²科学技術振興事業団) 中山裕介¹・豊田栄^{1,2}・吉田尚弘^{1,2}
- 1 D 05 大気中に存在する微小粒子中のナトリウムの起源 (東大海洋研・²東理大理) 大木淳之¹・植松光夫¹・三浦和彦²
- 1 D 06 中国西北部で採取された風送ダストの粒子物性 (¹理研・²山形大院・³中国科学院新疆生態与地理研究所・⁴中国科学院寒区旱区環境与工程研究所) 矢吹貞代¹・付鳳富¹・金山晋司^{1,2}・柳澤文孝²・曾凡江³・劉明哲³・劉立超⁴
- 1 D 07 鹿児島市大気中水銀の挙動 (鹿児島大理) 江口真之・穴澤活郎・坂元隼雄・富安卓滋
- 1 D 08 樹水中鉛同位体比を用いた大気汚染物質の移流解析 (福岡県保健環境研・²国環研) 永淵修¹・向井人史²
- 1 D 09 大気中 OH/HO₂ラジカル・NO_x に対するヨウ素化学反応のインパクト: 利尻島での観測事実とモデル計算 (地球フロンティア・²科学技術振興事業団・³国立環境研) 金谷有剛¹・松本淳²・横内陽子³・豊田賢二郎¹・秋元肇¹
- 1 D 10 大気中のメタン濃度測定のための標準ガスについて (¹気象研・²気象庁) 松枝秀和¹・坪井一寛²・須田一人²・大友猛²
- 1 D 11 都市森林における二酸化炭素の再利用に関する研究 (¹産総研・²名大院環境・³名大地球水循環研究センター・⁴気象庁・⁵名大年代測定総合研究センター・⁶東工大院総理工) 高橋浩¹・木平英一²・檜山哲哉³・小栗秀之⁴・南雅代²・中村俊夫⁵・吉田尚弘⁶

第2日(10月19日)午前

戸丸仁¹・松本良¹・内田隆²・盧海龍³

【A会場】

一般講演 [海洋]

(8:45~11:30) 座長:張勁・渡邊修一

- 2A 01 海水中³²Siの高回収率吸着剤の検討(北大院地球環境) 乗木新一郎・岸直哉
- 2A 02 海藻による²³²Th及び²³⁸Uの取り込み(新潟県保健環境科学研) 加藤健二・殿内重政
- 2A 03 鹿児島湾海水中の微量重金属の含有量とその分布(鹿大理) 坂元隼雄・小林幸英・富安卓滋・穴澤活郎
- 2A 04 鹿児島湾海水中のヒ素及びアンチモンの含有量とその化学形(鹿大理) 坂元隼雄・石山裕美・穴澤活郎・富安卓滋
- 2A 05 マンガン団塊中のCo, Ce, Pbの酸化状態と濃縮機構(¹広大院理・²産総研・³鳥取大工・⁴高輝度光科学研究センター・⁵高工エネルギー加速器研究機構物質構造科学研) 高橋嘉夫¹・臼井朗²・奥村和³・村上未央¹・清水洋¹・宇留賀朋哉⁴・野村昌治⁵
- 2A 06 グアム島のサンゴ骨格に記録された酸素・炭素同位体比変化(東北大院理) 浅海竜司・山田努・井龍康文
- 2A 07 造礁サンゴ群体間における骨格同位体比の非平衡度合いの差とそれが古水温推定に及ぼす影響(東北大院理) 山田努・浅海竜司・小林久子・井龍康文
- 2A 08 西部北太平洋表層水の炭酸系の冬から夏にかけての変化(北大院地球環境) 角皆静男・杉浦琴・渡邊修一
- 2A 09 東部熱帯北太平洋における溶存N₂Oのアイソトポマー鉛直分布(東工大院総合理工・²Univ. Hawaii・³Michigan State Univ.・⁴科学技術振興事業団) 山岸洋明¹・M. Westley²・B. Popp²・N. Ostrom³・豊田栄^{1,4}・吉田尚弘^{1,4}
- 2A 10 オオグチボヤの安定同位体組成からみる富山湾海底の冷湧水(富山大・²広大・³筑波大・⁴慶応大) 張勁¹・佐竹洋¹・八田真理子¹・山腰裕子¹・鈴木麻衣¹・長沼毅²・竹内章¹・齊藤康典³・小川麻理⁴・奥山牧子³
- 2A 11 南海トラフにおける間隙水の塩分濃度・同位体組成異常が示すガスハイドレート生成モデル(¹東大院理・²石油資源開発・³石油公団)

【B会場】

一般講演 [地球外物質]

(8:45~10:15) 座長:米田成一・山下勝之

- 2B 01 パラサイト隕石母天体の物質分化過程:微量元素存在度からの考察(都立大理) 箕輪はるか・大浦泰嗣・海老原充
- 2B 02 ユークライトジルコンのウラン鉛同位体系(極地研) 三澤啓司・山口亮・海田博司
- 2B 03 火星隕石レールゾライト質シャーゴットイト Yamato 793605のSm-Nd同位体系(¹神戸大院自然・²神戸大理・³極地研・⁴米国地質調査所) 山田和弘¹・中村昇^{1,2}・三澤啓司^{1,2,3}・ガポールコンドロッシ¹・ウェインプリモ⁴・立本光信⁴
- 2B 04 火星隕石のSm, Gd同位体における中性子捕獲効果(¹広大院理・²国立科博・³カリフォルニア大パークレー) 日高洋¹・米田成一²・西泉邦彦³
- 2B 05 火星隕石 DaG 489, Dag 476, SaU 005, DHO 019, LA 001の希ガス同位体研究(東大院理) 朴芝鮮・岡崎隆司・長尾敬介
- 2B 06 層状チャート相P-T境界付近の希ガス同位体組成(東大院理) 大澤崇人・長尾敬介

一般講演 [地球外物質]

(10:15~12:00) 座長:日高洋・岡崎隆司

- 2B 07 Fluffy Type A CAIの形成過程(東工大院理工) 原園耕路・伊藤元雄・塚本尚義
- 2B 08 SrとBaによるCAIの鉱物晶出過程の追跡(学習院大理) 巻出健太郎・長沢宏
- 2B 09 Y 81020(COコンドライト)中のオリピン集合体の酸素同位体組成(¹東工大院理工・²カリフォルニア大ロサンゼルス) 伊藤正一¹・ルーピンアラン²・ワッソングジョン²・塚本尚義¹
- 2B 10 精密なCr同位体分析法の確立と惑星物質への応用(¹神戸大院自然・²神戸大理) 宮下高幸¹・山下勝行²・中村昇^{1,2}
- 2B 11 岩石中の塩素同位体分析法の改良と隕石への応用(¹神戸大院自然・²神戸大理) 川嶋雅則¹・中村昇^{1,2}・沼田雅彦¹・村田忠嗣¹
- 2B 12 神戸隕石のPb同位体研究(¹神戸大理・²ア

ルバータ大) 山下勝行¹・Larry M. Heaman²・中村昇¹

2 B 13 神戸隕石: コンソーティアム研究報告(1) (神戸大理) 中村昇

【C会場】

一般講演 [元素・同位体の分配および拡散]

- (8:45~11:30) 座長: 小高正敬・垣内正久
- 2 C 01 生物圏地球化学における希土類元素群の炭素循環研究への可能性 (農工大農・理研) 赤木右¹・付鳳富²
- 2 C 02 カルサイト 水溶液間における希土類元素の分配実験: 再論 (名大院環境) 田中万也・川邊岩夫
- 2 C 03 北光ピーズを用いる水素 水平衡法の改良 (産総研深部地質環境) 高橋正明・風早康平・安原正也
- 2 C 04 メリライト中の元素の拡散: 短寿命核種 Ca-K系に対する拡散の影響 (アリゾナ地球科学) 伊藤元雄・Jibamitra Ganguly
- 2 C 05 拡散係数測定のためのケイ酸塩ガーネットの作成 (東大 RI センター・学習院大理) 森岡正名¹・長沢宏²
- 2 C 06 メルト結晶成長過程の同位体分別 (産総研地球科学情報) 佐藤久夫・森下祐一・松久幸敬
- 2 C 07 揮発性金属元素の同位体変動の検証 (東大地震研・歴史民族博) 中井俊一¹・斉藤努²
- 2 C 08 Cu, Zn の同位体分別 (東大院・東工大院) 浅田陽一¹・平田岳史²
- 2 C 09 SO₂ガスがアルカリ性水溶液に吸収される際の動的同位体分別 (東工大火山流体センター) 大場武・平林順一・野上健治
- 2 C 10 水溶液中における塩素同位体分離係数測定 (秋田県大システム科学・上智大理工・³ISOLAB・⁴Utrecht University) 武蔵正明¹・大井隆夫²・H. G. M. Eggenkamp³・P. van Cappellen⁴・矢戸弓雄¹
- 2 C 11 火山岩中のホウ素同位体組成 Acid Digestion Bombを用いたホウ素の回収 (いわき明星大教養) 神崎忠雄

【D会場】

一般講演 [エアロゾル・黄砂]

- (8:45~10:45) 座長: 河村公隆・矢吹貞代
- 2 D 01 都市大気中 PAHs の安定炭素同位体比(2) 道路からの距離と同位体プロファイルの関係 (農工大農・東薬大生命・都立大院理) 奥田知明¹・熊田英峰²・奈良岡浩³・高田秀重¹
- 2 D 02 北極で採取されたエアロゾルと積雪中のジカルボン酸: 冬と春の組成変化 (北大院地球環境科学・北大低温科学研・³Meteorological Service of Canada) 成川正広¹・河村公隆²・S. M. Li³・J. W. Bottenheim³
- 2 D 03 ACE-Asia/C 130航空機観測で採取されたエアロゾル中の低分子ジカルボン酸の分布 (北大低温研・²ハワイ大) 河村公隆¹・持田陸宏¹・梅本延彦¹・Barry Huebert²
- 2 D 04 無人海洋大気観測艇による伊豆諸島周辺海域の大気成分測定 (東大海洋研・科学技術振興事業団・³紀本電子・⁴東海大海洋) 植松光夫¹・鈴木隆生²・紀本岳志³・千賀康宏⁴
- 2 D 05 陸起源エアロゾルと砂漠土壌の金属成分の比較 (北大院地球環境) 角皆静男・佐藤悠介
- 2 D 06 2001年の東北地方の「赤い雪」中に含まれる黄砂粒子の化学・Sr同位体的組成 (理研・²山形大院) 金山晋司^{1,2}・矢吹貞代¹・柳澤文孝²
- 2 D 07 中国北東地域に分布する砂漠土・黄土の地球化学 (筑波地球科学・²国環研・³中日友好環境保護センター) 横尾頼子¹・中野孝教¹・西川雅高²・全浩³
- 2 D 08 河口湖湖底堆積物を用いた黄砂フラックス変動の高時間分解能解析 (山梨県環境科学研・²科学技術振興事業団) 京谷智裕^{1,2}・輿水達司¹
- #### 一般講演 [降水]
- (10:45~11:45) 座長: 松葉谷治
- 2 D 09 雨水中の風送塵の Sr 同位体比, 1998~2000 (九大院理) 浜本礼子・柳哮
- 2 D 10 2000~2001年冬季の立山山岳地域における積雪の同位体比と化学組成 (富山大院理工・²富山大極東地域研究センター) 遠山和夫¹・佐竹洋¹・川田邦夫²
- 2 D 11 屋久島花崗岩流域における酸性降水物の中和

- 作用(¹九大院理・²福岡県保健環境研) 阿久根卓¹・永淵修²・吉村和久¹
- 2 D 12 横浜で観測された酸性雨(2000年1月~2001年3月)(横国大教育人間科学) 村山治太

第2日(10月19日)午後

【ポスター会場：一階ホワイエ】

(コアタイム 12:30~14:00 ポスター掲示は2日目9時から)

ポスター講演

[大気・降水]

- 2 P 01 苫小牧フラックスリサーチサイトにおいて観測された森林内の大気二酸化炭素安定同位体比の時間変動(国環研) 高橋善幸・遠嶋康徳・町田敏暢・藤沼康実
- 2 P 02 青森県六ヶ所村における Be-7 降下量の季節変動(環境科学技研) 川端一史・長谷川英尚・大塚良仁・赤田尚史・稲葉次郎・近藤邦男
- 2 P 03 都市森林における大気二酸化炭素の動態の季節変化に関する研究(¹産総研・²名大院環境・³名大地水研・⁴名大年代測定セ・⁵東工大院総合理) 高橋浩¹・木平英一²・檜山哲哉³・南雅代²・中村俊夫⁴・吉田尚弘⁵
- 2 P 04 風送ダストの輸送途上で採取したエアロゾル粒子の予察的検討(¹産総研・²広大院理・³名大環境・⁴福岡大理) 金井豊¹・太田充恒¹・上岡晃¹・寺島滋¹・松久幸敬¹・清水洋^{1,2}・高橋嘉夫^{1,2}・甲斐憲次³・徐伯瑜³・林政彦⁴
- 2 P 05 東京都文京区と群馬県太田市の降雨に含まれている非海塩性硫酸イオンの硫黄同位体比三宅島噴火の影響(¹山形大理工・²山形大理・³関東学園大・⁴三菱マテリアル) 赤田尚史¹・柳澤文孝²・本山玲美¹・瀧上豊³・川端明子⁴・上田晃⁴
- 2 P 06 バイオマス燃焼過程で生成する N₂O のアイソトポマー解析(¹科技振・²東工大院総理工・³農環研) 小川光輝¹・中川書子¹・尾崎洋子²・奈良英樹²・山田桂大^{1,2}・豊田栄^{1,2}・吉田尚弘^{1,2}・須藤重人³・米村正一郎³・鶴田治雄³
- 2 P 07 大気中のガス状あるいは微細粒子状金属化合物の起源についての一考察(近大理工・²日

- 立サイエンスシステムズ) 西村崇¹・中口讓¹・白崎俊浩²・野村晃一¹・山口善敬¹・平木敬三¹
- 2 P 08 バイオマス燃焼起源メタンの安定同位体比(¹東工大院総理工・²科技振・³農環研) 尾崎洋子¹・山田桂大^{1,2}・中川書子²・小川光輝²・須藤重人³・米村正一郎³・鶴田治雄³・吉田尚弘^{1,2}
- 2 P 09 ACE-Asia 観測における海洋大気エアロゾル研究: NOAA R/V Ronald H. Brown 上における低分子ジカルボン酸の測定(¹北大低温・²NOAA PMEL) 持田陸宏¹・梅本延彦¹・松永壮¹・河村公隆¹・Timothy S. Bates²
- 2 P 10 沖縄島中部における降水及びドライフォールアウトの化学組成に関する研究(琉球大理) 岩崎綾・渡久山章

[岩石・地殻]

- 2 P 11 MC-ICPMS による火山岩中の Ra の定量(東大地震研) 徳永彩未・中井俊一
- 2 P 12 沖縄本島北部地域における岩石中のウラン比について(¹琉球大理・²琉球大機器分析セ) 嘉手納恒¹・棚原朗²・平良初男¹
- 2 P 13 岩石風化土壌中の微量元素の挙動 八溝山地南部の例(産総研) 上岡晃・関陽児・月村勝宏・金井豊・金沢康夫・濱崎聡志・中嶋輝允
- 2 P 14 三宅島溶岩試料の²³⁸U/²³⁰Th 放射非平衡分析(¹東大地震研・²千葉大院自然科学・³千葉大理) 福田聡¹・中井俊一¹・新堀賢志²・津久井雅史³・中田節¹
- 2 P 15 Hf 同位体組成によるコマチアイトの成因の研究(¹東大地震研・²東工大理) 立田理一郎¹・中井俊一¹・小宮剛²
- 2 P 16 炭酸カルシウムへの硝酸イオンの取り込みについて(¹琉球大理・²琉球大機器分析セ) 小沢奈央¹・平良初男¹・棚原朗²
- 2 P 17 岩石試料のストロンチウム・ネオジウム・鉛同位体組成の分析法と地質調査所標準岩石試料の測定結果(¹京大地球熱・²海技セ) 柴田知之¹・芳川雅子¹・巽好幸²
- 2 P 18 遠洋深海性層状チャート中の微量元素の酸化還元状態による古環境の評価(¹東大院理・²東大院総合文化) 清宮貴美子¹・松尾基

- 之²・磯崎行雄²
 2 P 19 ジルコン中のセリウムの酸化状態とセリウム異常 (¹広大院理・²東大院理・³名大博物館・⁴高工ネ研) 高橋嘉夫¹・清水洋¹・鍵裕之²・足立守³・野村昌治⁴

[環境]

- 2 P 20 オーストラリア・ビルバラ地域の先カンブリア紀炭酸塩岩の希土類元素組成 (¹名大院環境・²名大理・³阪大院理・⁴名大博物館) 山本鋼志¹・伊藤信和²・松本拓也³・足立守⁴
 2 P 21 環境試料中のウラン系列核種の挙動と核種移行のナチュラルアナログ (産総研) 金井豊・上岡晃・三田直樹・竹内理恵
 2 P 22 森林土壌における U, Pu, Cs 同位体の深度分布 (放医研) 吉田聡・村松康行
 2 P 23 沖縄県本島周辺海域における有機スズ化合物のキャラクタリゼーション (¹琉球大理・²資環研) 澤野健三郎¹・大森保¹・田尾博明²
 2 P 24 琵琶湖南岸地域のヒノキ年輪の安定炭素同位体比を用いた気候変動再現の試み (¹名工大・²産総研・³名大年代測定セ) 庄建治朗¹・高橋浩²・中村俊夫³

[元素・同位体の分配]

- 2 P 25 オーストラリアに産する I/S タイプ花崗岩から分離した石英中の希ガス同位体の研究 (¹物質研・²東京院地殻化学・³梨花女子大地球科学) 鄭貞仁¹・長尾敬介²・角野浩史²・金桂漢³
 2 P 26 消滅核種同位体分析に向けた ICP 質量分析法の開発 (東工大院理工) 谷水雅治・平田岳史
 2 P 27 連続フロー型質量分析法を用いた簡易・高感度での水試料酸素同位体比測定法の開発 (北大院理) 井尻暁・角皆潤・蒲生俊敬
 2 P 28 Isotopic fractionation factors between water and dissolved hydrogen at elevated temperatures and pressures (¹Inst. Study Earth's Interior, Okayama Univ.・²Engin. Res. Science, Akita University) N. Kishima¹・O. Matsubaya²
 2 P 29 Ni₂SiO₄, Co₂SiO₄および Mn₂SiO₄カンラン石の熱量測定実験: オルソシリケートの融解熱

のシステムティクスとカンラン石 メルト分配への応用 (学習院理) 菅原透・赤荻正樹

[有機物・生物]

- 2 P 30 秋田県玉川地域の自然噴気中の炭化水素 (産総研) 猪狩俊一郎・前川竜男・坂田将
 2 P 31 分子レベル放射性炭素年代測定並びに分子レベル安定炭素同位体比分析から推察される大気エアロゾル中の脂肪酸の起源について (¹北大低温研・²海技セ・³環境研) 松本公平¹・河村公隆¹・内田昌男²・柴田康行³
 2 P 32 模擬原始地球大気からの高分子量有機物の生成 (横国大院工) 大橋暁弘・金子竹男・小林憲正
 2 P 33 模擬原始地球・地球圏外環境下での核酸塩基の生成 (横国大院工) 竹田周平・山梨洋人・宮川伸・小林憲正
 2 P 34 フェナントレンの衝撃反応 (名大院環境) 三村耕一・荒尾泰介
 2 P 35 新生代中緯度地域における高等植物樹脂バイオマーカ-炭素同位体比の変動 (北大院理) 吉田拓也・亀井良哉・鈴木徳行
 2 P 36 生物遺体の炭素窒素同位体分析より推定する本邦における陸上動植物生態の変化 (北大院地環) 南川雅男・倉本敏克・大橋麻美・岩本純平
 2 P 37 化石骨の放射性炭素年代ならびに炭素・窒素同位体比測定 コラーゲン抽出法の検討 (¹名大院環境・²名大年代測定セ) 南雅代¹・武藤宏男²・中村俊夫²

[陸水]

- 2 P 38 地球熱水環境におけるアミノ酸存在量と光学異性比 (横国大院工) 高野淑識・堀内司・金子竹男・小林憲正
 2 P 39 草津白根山における火山ガスの希ガス同位体組成 (¹東工大火山流体研究セ・²東大院理) 大和田道子¹・大場武¹・平林順一¹・野上健治¹・中村一茂¹・長尾敬介²
 2 P 40 天然水中の腐植物質と金属との錯形成反応に関する研究 三次元励起・蛍光光度法を用いた蛍光特性の変化 (¹近大理工・²原研燃料サイクル) 今中麻幸代¹・長尾誠也²・中口讓¹・平木敬三¹

[地球外物質]

- 2 P 41 Allende 隕石 CAI 中のペロプスカイトの宇宙化学的特徴 (¹広島大学・²国立科博) 山口恵弘¹・小川拓哉¹・日高洋¹・米田成一²
- 2 P 42 「十和田隕石」 新しく発見された日本の隕石 (¹科博・²都立大院理・³理研・⁴固体地球研究セ・⁵東大院理) 米田成一¹・海老原充²・大浦泰嗣²・岡田昭彦³・日下部実⁴・長尾敬介⁵

[海洋]

- 2 P 43 SIMS によるサンゴ骨格の微小領域分析 (産総研) 岡井貴司・鈴木淳・木多紀子・富樫茂子・森下祐一・川幡穂高
- 2 P 44 メタンハイドレート相平衡条件の統計熱力学的推定 (産総研) 前川竜男
- 2 P 45 瀬底島サンゴ礁における大気 海洋間の CO₂ フラックス (¹琉球大理工・²琉球大理) 北田幸男¹・藤村弘行¹・大森保²
- 2 P 46 北太平洋中緯度域における溶存有機炭素および海洋腐植様物質の分布・挙動に関する研究 (¹近大理工・²関西総合環境セ) 山口善敬¹・中口譲¹・荒木祥子¹・秦野善行¹・木村宗人²・平木敬三¹
- 2 P 47 Ln Resin を用いた海水及び地下水中の希土類元素の分析 (広大院理) 田中智子・酒見泰・高橋嘉夫・清水洋
- 2 P 48 富山湾への溶存態および粒子態リンのフラックス (¹富山大学・²富山県水産試験場) 八田真理子¹・笠原一世¹・小善圭一²・張勁¹

[堆積物]

- 2 P 49 porcellanite と host sediment 間の化学分別 (名大院環境) 武辺勝道・山本綱志
- 2 P 50 埋没・続成過程における珪藻のシリカ熟成度の定量化と有機物の変化 (¹電力中研・²東工大理工) 伊藤由紀¹・中嶋悟²
- 2 P 51 本州西部地域の地球化学図と元素の分布特性 (産総研) 今井登・寺島滋・岡井貴司・御子柴真澄・金井豊・上岡晃・富樫茂子・松久幸敬
- 2 P 52 静岡県菊川水系河床における微生物によるマンガン酸化皮膜の形成 (静岡県立大環境) 谷幸則¹・宮田直幸¹・岩堀恵祐¹・相馬光之¹
- 2 P 53 石炭中の希土類元素パターンを用いる石炭の

起源植物種の追跡 (理研・²東京農工大学農・³産総研) 付鳳富¹・赤木右²・矢吹貞代¹・鈴木祐一郎³

- 2 P 54 バイカル湖堆積物コア BDP 98 から見たクロロフィル a 続成作用 (¹静岡県立大環境・²国立環境研) 相馬悠子¹・田中敦²・相馬光之¹・奈良郁子¹・伊藤信靖¹・谷幸則¹・河合崇欣²
- 2 P 55 海底堆積物中のセレン(1) (近大理工) 高田正貴・服部裕史・中口譲・山口善敬・竹井宗靖・平木敬三
- 2 P 56 海底堆積物中のセレン(2) (近大理工) 高田正貴・服部裕史・中口譲・田中伸幸・平木敬三
- 2 P 57 陸 海洋系における表層堆積物中長鎖 n アルカンと飽和脂肪酸の分子レベル炭素・水素同位体組成 (都立大院理) 山田祐介・力石嘉人・奈良岡浩
- 2 P 58 太平洋堆積物コア (ODP leg 191) 中の Fe, Mn, Ce の酸化還元状態の深度プロファイル (広大院理) 福川昌宏・高橋嘉夫・早坂康隆・酒井陽一・清水洋

[物質循環・地球化学のプロセス]

- 2 P 59 苫小牧フラックスリサーチサイトにおいて観測された大気と森林生態系間における酸素と二酸化炭素の交換比率 (環境研) 遠嶋康徳・高橋善幸・町田敏暢・藤沼康実
- 2 P 60 地球化学的サイクルにおける元素の挙動と分類 堆積岩類に濃集する「可溶性成分」を中心に (産総研) 茂野博
- 2 P 61 LPTM (late Paleocene thermal maximum) における炭素循環：海洋炭素循環モデルによる再現 (東大院理) 松岡景子
- 2 P 62 東シベリアタイガ林における CO₂濃度と安定同位体組成の鉛直プロファイル季節変動 (京大生態研) 内藤太輔・杉本敦子
- 2 P 63 三宅島火山における SO₂の大量放出とマグマ過程 (¹産総研・²東工大火山流体観測セ・³気象庁三宅島・⁴気象庁福岡) 風早康平¹・平林順一²・尾台正信³・森博一⁴・中堀康弘³・篠原宏志¹・斎藤元治¹・宇都浩三¹
- 2 P 64 新期雲仙火山の加速器放射性炭素年代 (¹核燃料サイクル東濃地・²東濃地科研・³産総

- 研) 徐勝^{1,2}・星住英夫³・落合洋治¹・青木治三²・宇都浩三³
- 2 P 65 黒ボク土における土壤構成鉱物, 元素の地球化学的挙動(¹慶應義塾・²地調) 大谷晴啓¹・鹿園直建¹・野原昌人²
- 2 P 66 ¹⁰⁰Mo ¹⁰⁰Ru 二重ベータ崩壊の半減期の地球化学的決定のための開発(¹広大・²京大) チーヴィンリー¹・日高洋¹・鈴木勝彦²

[その他]

- 2 P 67 岩石・堆積物等の地球化学情報のデータベース化に関する研究(産総研) 今井登
- 2 P 68 フィリピン Palawan 及び Dinagat オフィオライト中の chromitite の Re-Os システムティクス: 多段階成長の証拠(¹京大院地熱・²東大院総合文化・³IFREE, JAMSTEC・⁴東大院海洋) 鈴木勝彦¹・R. A. Santos²・高野穆一郎²・巽好幸³・宮田佳樹¹・野崎義行⁴
- 2 P 69 ハワイ, アイスランドブルーム起源岩の Pt-Os, Re-Os システムティクス: コア マントル相互作用の検証(¹京大院地熱・²IFREE, JAMSTEC・³産総研) 鈴木勝彦¹・本多将俊²・篠塚一典²・下田玄³・巽好幸²
- 2 P 70 ポリネシア Rarotonga 海洋島玄武岩の Re-Os システムティクス(¹京大院地熱・²IFREE, JAMSTEC) 鈴木勝彦¹・G. Thompson¹・柴田知之¹・本多将俊²・巽好幸²
- 2 P 71 Total evaporation-TIMS 法による Re の同位体比測定(京大院地熱) 鈴木勝彦
- 2 P 72 ICP 質量分析法による標準岩石中の白金族元素の定量(IFREE, JAMSTEC・²京大院地熱・³産総研) 篠塚一典¹・鈴木勝彦²・下田玄³・本多将俊¹・巽好幸¹
- 2 P 73 ポリネシア Tubuai の海洋島玄武岩の Re-Os 同位体的特徴(IFREE, JAMSTEC・²京大院地熱) 本多将俊¹・鈴木勝彦²・巽好幸¹
- 2 P 74 宇宙・地球化学的試料に対する k0 標準化中性子放射化分析法の適用 標準試料を必要としない非破壊多元素同時分析法(東大原子力研究セ) 尾崎大真・澤幡浩之・川手稔・伊藤泰男
- 2 P 75 北西部北太平洋表層堆積物中有機分子(アルケノン, 脂肪酸, 炭化水素)の分子レベル放射性炭素年代決定(¹海技セ・²環境研・³北大低温研・⁴筑波大) 内田昌男^{1,2}・柴田康行²・河村公隆³・熊本雄一郎¹・米田穰²・大串健一⁴・向井人史²・原田尚美¹・森田昌敏²
- 2 P 76 安定同位体組成より考察した森林地帯における一酸化炭素の起源(¹東工大院総合理工・²科学技術振興事業団・³京大生態学研究セ・⁴京大生態学研究セ) 中川書子^{1,2}・小松大祐³・角皆潤³・蒲生俊敬³・吉田尚弘^{1,2}・杉本敦子⁴
- 2 P 77 バイオマス燃焼過程で生成する一酸化炭素の同位体解析(¹東工大院総合理工・²科学技術振興事業団・³北大院理・⁴農業環境技研) 中川書子^{1,2}・角皆潤³・尾崎洋子¹・奈良英樹¹・小川光輝^{1,2}・山田桂大^{1,2}・吉田尚弘^{1,2}・須藤重人⁴・米村正一郎⁴・鶴田治雄⁴

[A 会場]

[総会]

(14 : 00 ~ 15 : 30)

[2001 年度日本地球化学会学会賞等受賞講演]

(15 : 30 ~ 17 : 40)

- 奨励賞 マントル起源超塩基性岩の希ガス同位体研究(阪大院理) 松本拓也
- 学会賞 海洋における天然放射性核種と希土類元素の分布と変動に関する地球科学的研究(東大海洋研) 野崎義行
- 学会賞 安定同位体地球化学による火山性揮発物質の研究と自然災害への応用(岡大固体地球) 日下部実
- 柴田賞 希土類元素の宇宙・地球化学の開拓とその発展(東大理) 増田彰正

第 3 日 (10 月 20 日)

[A 会場]

[有機物・生物]

(9 : 00 ~ 10 : 30) 座長: 奈良岡浩・吉岡秀佳

- 3 A 01 レーザーマイクロパイロリシスによる有機物分析方法の開発(石油公団・科学技術振興事業団) 吉岡秀佳
- 3 A 02 tertiary-Butyldimethylsilyl 誘導体化を用いた脂質化合物の簡便・迅速な分析法とその地球化学的意義(東海大海洋) 渡邊隆広・西村弥亜

- 3 A 03 海洋プランクトンに由来する24 ノルコレステロール (1北大理・2筑波大生物) 安尾尚子¹・鈴木徳行¹・岩本浩二²・白岩善博²
- 3 A 04 環境変化に対する円石藻脂質の不飽和度の変化速度の解析 (1北大院理・2筑波院生命環境・3筑波大生物) 沢田健¹・吉田昌樹²・井上勲³・白岩善博³
- 3 A 05 超微量有機分子レベル安定水素同位体比測定と有機宇宙地球化学への応用 (都立大院理) 奈良岡浩・カ石嘉人
- 3 A 06 榛名湖環境における直鎖飽和脂肪酸, n アルカンの分子レベル水素・炭素同位体組成 (都立大院理) カ石嘉人・奈良岡浩

[堆積物]

(10:30~12:00) 座長:南川雅男・三瓶良和

- 3 A 07 浜名湖における光合成色素の堆積過程 (静岡県立環境研) 伊藤信靖・谷幸則・相馬光之
- 3 A 08 BDP 98堆積物中の steryl chlorin esters が示す鮮新世・バイカル湖における藻類活動の変遷 (1静岡県立環境研・2国立環境研・3大妻女子大) 奈良郁子¹・谷幸則¹・相馬悠子¹・相馬光之¹・田中敦²・河合崇欣²・松本源喜³
- 3 A 09 バイカル湖柱状堆積物に記録された氷期と間氷期におけるステロールの分布特徴 (東海大海洋) 下川原誠・西村弥亜
- 3 A 10 バイカル湖コア堆積物中 n-alkane の氷期間氷期における分子・同位体組成変化 (都立大院理) 堀田園江・David Brincaat・奈良岡浩・石渡良志
- 3 A 11 スリランカの乾燥・湿潤地域の湖沼堆積物にみられる過去100年間の堆積環境変化と有機物濃度/起源の関係 (1北大院地球環境・2島根大理工・3石油公団) ナリン パラサンナラトナヤカ¹・三瓶良和²・徳岡隆夫²・石田聖³
- 3 A 12 シナイ半島・Solar Lake における, 現世ストロマトライトのバイオマーカーの安定炭素・水素同位体比組成 (1都立大院理・2カーン・ボン・オシエツキー大学) 小泉孝行¹・奈良岡浩¹・石渡良志¹・W. Krumbein²
- 3 A 14 植物色素および安定同位体より推定するタイ南西部沿岸堆積物中の有機物起源 (北大院地球環境) 栗林貴範・南川雅男
- 3 A 15 ココリスブルーム時に合成されるアルケノンについて 2000年ベーリング海で発生した E. huxley ブルームの観測から (1海技セ・2MWJ・3観測フロンティア・4北大院地球環境) 原田尚美¹・中谷朋子²・村田昌彦¹・内田昌男¹・申昶勲³・成田尚史⁴
- 3 A 16 北太平洋中緯度外洋域のバイオマーカーの空間分布と海洋環境変遷 (1北大院地球環境・2放医研) 天羽美紀¹・山田正俊²・南川雅男¹
- 3 A 17 北西部北太平洋堆積物中に含まれる陸起源成分の氷期 間氷期間変動 (北大院地球環境) 成田尚史・重光雅仁・角皆静男
- 3 A 18 X線分析顕微鏡を用いた中新世珪質岩の主要元素組成迅速分析と日本海古海洋変動の高解像度復元 (東大院理) 越川敏忠・木戸芳樹・多田隆治
- 3 A 19 タービダイトシークエンスの地球化学的地質学的特徴より推測された古海洋環境: 千葉県房総半島安野層の例 (1慶應理工・2京大理・3地調・4筑波大地球) 鹿園直建¹・岩井修平¹・石原与四郎²・野原昌人³・中野孝教⁴
- 3 A 20 現世堆積物中の硫黄とセレンの地球化学的挙動及び環境化学的意義 (1東大院総合文化・2中国科学院蘭州地質研) 鄭国東¹・高野穆一郎¹・松尾基之¹・久野章仁¹・王其²・史基安²

[堆積物 (古環境)]

(15:00~16:15) 座長:佐野有司・坂田将

- 3 A 21 西オーストラリア, ビルパラブロック (ゴールズワージー地域) に産する始生代チャート及び縞状鉄鉱層の地球化学的研究 (名大院環境学) 山下史哲・杉谷健一郎・山本鋼志
- 3 A 22 南西 Gondwana 堆積盆地前期ペルム紀堆積物中のバイオマーカー (1産総研・2ニュージーランド地質・核科学研・3石油公団) 坂田将¹・ケビンフォーレ²・横山ゆかり³

[堆積物]

(13:00~15:00) 座長:成田尚史・原田尚美

- 3 A 13 中池泥炭地コアに見られる植生指標有機物

- 3 A 23 二次イオン質量分析計を用いた生物化石のウラン-鉛年代測定と希土類元素存在度に基づく古環境の復元（¹東大海洋研・²広大院理）佐野有司^{1,2}・寺田健太郎²
- 3 A 24 有機物組成から見た舟伏山石灰岩及び秋吉石灰岩の堆積環境（¹名大院理・²名大院環境・³九大院理）木村理恵¹・三村耕一²・井川敏恵³・佐野弘好³
- 3 A 25 登米層燐酸塩岩・炭酸塩岩の成因：間隙水組成の進化（信州大理・²山形大理）森清寿郎¹・松永絹子¹・蟹澤聰史²・岩政一生¹

【C会場】

一般講演 [陸水]

- （9：00～11：00）座長：坂元隼雄・佐竹洋
- 3 C 01 筑波山 加波山の花崗岩帯における地下水組成変動（慶大理工）宮本慎也・鹿園直建
- 3 C 02 被圧地下水の陰イオン組成と硫黄同位体組成について 大阪平野北東地域を事例として（筑波大地球科学）山中勝・中野孝教・田瀬則雄
- 3 C 03 活断層周辺における地下水の挙動（¹富山大院理工・²富山大理）北裕一郎¹・佐竹洋²
- 3 C 04 兵庫県西宮市南部地域の浅層地下水（宮水）中の希土類元素存在度（¹神戸大総合人間科学・²神戸大発達科学）大塚美知代¹・寺門靖高²
- 3 C 05 乗鞍火山地域における陸水形成機構 多変量解析法の応用（¹鹿児島大理・²東大新領域創成科学）穴澤活郎¹・坂元隼雄¹・富安卓滋¹・大森博雄²
- 3 C 06 群馬県奥万座の湧水並びに河川水の溶存成分組成（¹上智大理工・²東工大）木川田喜一¹・山比羅守¹・大井隆夫¹・小坂丈予²
- 3 C 07 奈良県下の大和川水系の水質（栄養塩類）分析（¹奈良教育大化学・²滋賀県立大環境科学・³奈良商業高）松村竹子¹・森井祐幸¹・丸尾雅啓²・谷幸三³
- 3 C 08 中国四川省黄龍のトゥファとその生成環境（¹九大院理・²中国岩溶研・³鹿児島大農）吉村和久¹・劉再華²・曹建華²・袁道先²・井倉洋二³

一般講演 [自然災害の予知]

- （11：00～12：00）座長：大場武
- 3 C 09 水素ガスなどの放出を伴う稲田花崗岩の一軸圧縮破壊実験（¹名大環境研・²名大理地震火山観測センター）犬塚吉博¹・川邊岩夫¹・山田功夫²
- 3 C 10 長島観測井での温泉ガス組成・水温の異常変化：三重県中部の地震（10/31/2000 M=5.5）の地震前兆現象（¹名大院環境・²東大理地殻化学）森康則¹・川邊岩夫¹・犬塚吉博¹・伊藤貴盛²
- 3 C 11 竜洋観測井で観測された二酸化炭素の潮汐応答（東大理地殻化学）伊藤貴盛・角森史昭・五十嵐丈二
- 3 C 12 Flute de Pan から採取したガス試料に基づくカメルーン・ニオス湖の希ガス深度分布（¹東大院理・²岡山大地球研・³吉田技術士事務所・⁴IRGM Cameroon）長尾敬介¹・日下部実²・吉田裕³・Aka Festus Tongwa⁴

一般講演 [熱水]

- （13：00～15：00）座長：小林憲正・蒲生俊敬
- 3 C 13 飛騨火山列（北アルプス）下部の地震トモグラフィと広域熱水系（¹岡山大固体地球研究センター・²東工大火山流体研究センター・³富山大理・⁴東大地殻化学）日下部実¹・大和田道子²・佐竹洋³・長尾敬介⁴
- 3 C 14 秋田県八幡平地域の澄川温泉等の硫酸酸性熱水について（¹秋田県衛生科学研・²秋田大工学資源）武藤倫子¹・松葉谷治²
- 3 C 15 インド洋北部、アデン湾における海底熱水活動の発見とその化学的特徴（¹北大院理・²東大海洋研・³京大化研・⁴滋賀県立大・⁵琉大理・⁶金沢大工・⁷東北大院理）蒲生俊敬¹・蓮本浩志²・岡村慶³・畑中弘⁴・森矛都美⁵・知念正和⁵・田中潤也⁶・小松大祐¹・藤本博巳⁷・玉木賢策⁷・KH 00 5航海乗船研究者一同・角皆潤¹・上妻史宣¹・廣田明成¹
- 3 C 16 沖縄トラフ熱水活動域のシロウリガイおよび熱水成沈殿物中の希土類元素組成（東大海洋研）本郷やよい・野崎義行
- 3 C 17 超臨界水フローリアクターを用いた模擬海底熱水系での有機物の無生物的生成（横国大院工）Md. Nazrul Islam・金子竹男・小林

憲正

- 3 C 18 熱水環境におけるバクテリアバイオマーカーの安定炭素・水素同位体組成(¹都立大・理・²筑波大地球科学・³東北大理・⁴東薬大生命科学) 内藤卓¹・奈良岡浩¹・山中寿朗²・掛川武³・山岸明彦⁴
- 3 C 19 北海道豊羽鉱床における熱水変質岩中の生体構成元素の挙動とその意義(東北大院理) 野田雅一・掛川武
- 3 C 20 熱水環境(霧島温泉)における微生物相と堆積物中の古細菌由来テトラエーテル脂質の関連性について(九大院理) 谷本大・北島富美雄・村江達士

一般講演 [環境]

(15:00~16:45) 座長: 田中教幸・吉田尚弘

- 3 C 21 首都圏大気中における粒子状水銀の生成(電力中研) 坂田昌弘・丸本幸治
- 3 C 22 燃焼過程より放出される非メタン炭化水素の安定同位体比(¹東工大院総合理工・²科学技術振興事業団) 奈良英樹¹・山田桂大¹・中川書子²・吉田尚弘^{1,2}
- 3 C 23 環境試料水中の微量水銀の濃度と化学形(鹿児島大理) 坂元隼雄・下西牧子・穴澤活郎・富安卓滋
- 3 C 24 GIS(地理情報システム)を用いた元素濃度分布図の統計解析(産総研地球科学情報) 太田充恒・今井登
- 3 C 25 都市域及び非都市域の湖沼底質に記録された疎水性有機汚染物質の堆積フラックスの解析(¹農工大農・²原研・³東薬大生命科学) 菅家博英¹・長尾誠也²・熊田英峰³・高田秀重¹
- 3 C 26 アラスカで観測されたシラカバの年輪セルロース ¹⁸O(SMOW)の変動とその変動要因(北大院地球環境) 辻寛之・田中教幸
- 3 C 27 Vehicle Emission Markers of PM 10 in a Downtown Tunnel and Southern Ontario Air (Centre for Atmos. Chem., York Univ., Canada) Satoshi Irei and Jochen Rudolph.

【D会場】

一般講演 [分光法, 年代学]

(9:00~10:30) 座長: 高橋嘉夫・川本竜彦

- 3 D 01 SPring 8 放射光と実験室光源を用いた顕微赤外分光法の空間分解能(¹京大院理・²東大院理・³岡大固体地球セ) 松影香子¹・川本竜彦¹・鍵裕之²・半田智子²・山下茂³
- 3 D 02 流体が不均一に分布したキューボイドダイヤモンドの赤外分光法による水濃度測定(¹東大院理・²東京農工大農) 川上曜子¹・鍵裕之¹・赤木右²
- 3 D 03 カルボナドダイヤモンドの微細構造と炭素同位体組成(¹東大院理・²住友電工・³物質材料研・⁴農工大農) 鍵裕之¹・佐藤周一^{2,3}・神田久生³・赤木右⁴
- 3 D 04 ジルコンへの放射線照射と不純物原子周辺の局所構造変化(¹東大院理・²産総研・³広大院理・⁴高工ネ研・⁵東大原総セ・⁶名大博物館) 半田智子¹・鍵裕之¹・津野宏²・太田充恒²・高橋嘉夫³・野村昌治⁴・岩井岳夫⁵・柴田裕実⁵・足立守⁶
- 3 D 05 アーキアンシリカペインに含まれるアパタイトのイオンマイクロプローブウラン鉛年代測定(¹広大院理・²東大海洋研・³東工大院理) 西澤学¹・寺田健太郎¹・佐野有司²・上野雄一郎³
- 3 D 06 U-Pb 壊変系と希土類元素存在度からみたウラン鉱物の変質に伴う物質移動(広大院理) 堀江憲路・日高洋

一般講演 [年代学, 岩石]

(10:30~12:00) 座長: 下田玄・柴田知之

- 3 D 07 ネパールの小ヒマラヤとチョモランマ層における石灰岩のPb-Pb法による年代測定の試み(¹東大地震研・²九大院比較社会文化) 渡邊裕美子¹・中井俊一¹・酒井治孝²
- 3 D 08 菱刈浅熱水性金鉱床周辺の火山岩の起源物質とその成因(筑波大地球科学・²金属鉱業事業団) 細野高啓¹・中野孝教¹・村上浩康²
- 3 D 09 花崗岩に含まれる気体炭素化合物の特徴と花崗岩系列(¹名大院人間情報・²名城大・³Macquarie University) 永峰康一郎¹・杉崎隆一²・Bruce W. Chappell³
- 3 D 10 南九州北薩地域の火山岩類の地球化学的研究

- (2) (¹秋田大工学資源・²環境科学技術研)
 下池洋一¹・浅川敬公¹・北逸郎¹・山元正
 継¹・長谷川英尚²
 3 D 11 明神海丘火山岩の REE, Sr-Nd 同位体比 (産
 総研) 野原昌人, 湯浅真人, 村上文敬

一般講演 [マントル]

- (13 : 00 ~ 15 : 15) 座長 : 鈴木勝彦・山本順司
 3 D 13 高温度高圧力条件における富士火山1707年噴
 火の安山岩 流紋岩質マグマと超臨界水の間の
 完全固溶現象のその場観察 (京大院理)
 川本竜彦・松影香子
 3 D 14 スラブメルトと結晶分別作用は EM 成分の
 成因か? (¹産総研・²熊大理) 下田玄¹・能
 田成²
 3 D 15 ウェッジマントルに存在する複数の流体の起
 源 (¹東大院理・²東大地震研・³金沢大院自然
 科学) 山本順司¹・兼岡一郎²・鍵裕之¹・中
 井俊一²・荒井章司³
 3 D 16 レユニオンホットスポットの Sr, Nd および
 Pb 同位体進化史 : モーリシャス島の結果か
 ら (¹熊大理・²東大地震研・³地質調査総合
 セ) 能田成¹・兼岡一郎・羽生毅²・宇都浩

- 三³
 3 D 17 海洋島玄武岩にみられる希ガス同士の挙動に
 関する相関の有無について (東大地震研)
 兼岡一郎
 3 D 18 マントル捕獲岩中の窒素同位体比 深部マン
 トルの窒素は軽い (¹東大海洋研・²東大地
 震研) 高畑直人¹・兼岡一郎²・佐野有司¹
 3 D 19 インド洋ロドリゲス 3 重会合点の中央海嶺玄
 武岩中のリチウム同位体比 (¹東大地震研・
²東大海洋研) 西尾嘉朗¹・中井俊一¹・石井
 輝秋²・佐野有司²
 3 D 20 Behaviour of platinum-group elements dur-
 ing serpentinization of the Nidar ophiolite,
 Himalaya (Radiogenic Isotope Labo., Wa-
 dia Inst. Limalayan Geol.・Dept. Earth
 Planet. Sci., TITech) N. Siva Sid-
 daiah・平田岳史
 3 D 21 アデン湾, 東経46°近傍における E-MORB
 の岩石学的研究 (¹東大地震研・²東大海洋
 研・³東大院理・⁴サヌア大) 折橋裕二¹・原
 口悟²・角野浩史³・石井輝秋²・長尾敬介³・玉
 木賢策²・Salah Al-Khrbush⁴

訃報：野口喜三雄 名誉会員

本学会名誉会員の野口喜三雄博士は、平成13年4月5日午前9時47分逝去されました。享年96歳でした。御冥福をお祈り申し上げます。

野口喜三雄博士は、昭和7年東京帝国大学理学部化学科を卒業後、同大学の助手、講師、助教授を経て、昭和24年東京都立大学教授とされました。昭和44年に定年退職し名誉教授になられた後、昭和45年から51年は東邦大学教授を勤められました。

生涯にわたって火山や温泉の地球化学的研究を行われ、昭和52年には勳三等瑞宝章、昭和55年には三原山の研究で東京都大島町町から表彰状、昭和59年には温泉の研究で環境庁長官から表彰状を受けられました。

野口喜三雄博士は、本学会の前身である地球化学研究会の創設時からの会員で、昭和35～42年の間委員（現在の評議員）をつとめられました。

（野津憲治会員）

2001年度第1回「鳥居基金」 助成実施報告（TE 26）

高橋嘉夫（広大院理）

助成：海外渡航（イタリア共和国）

課題：国際会議 Water-Rock Interaction における論文発表

Water-rock Interaction 国際会議は、地球で起きる水・岩石相互作用を幅広く扱った学会であり、関連する様々な地学現象や環境問題を研究している多くの研究者が集う場となっている。国際地球・宇宙化学連合（IAGC）により主催され、1974年の第1回から数えて本会で第10回目の会合（3年に1度）となる。今回は6月10日～15日の6日間、イタリアのサルジニア島 Villasimius にある Tanka Village というホテルで行われた。周囲には目立った街はなく、学会に専心できる環境であったといえる。運営責任者はサルジニア州の州都 Cagliari にある Cagliari 大学の L. Fanfani 教授であったが、運営の殆どは Corsi & Congressi という地元の会社に委ねられていたようであった。世界45カ国より450名の研究者が参加し、380件の発表があった。このうち日本の大学・研究所を所属先とする者は、19名であった。

本学会のトピックは、(1)地球化学的サイクル、(2)熱力学的定数の精密化とそれを利用したモデル化、(3)水・鉱物表面での諸現象、(4)地下水に関する研究、(5)マグマ活動、変成作用、鉱化作用、火山・熱水活動に関連した現象、(6)堆積盆、(7)微量元素の移動度、(8)汚染とその除去、廃棄物処分などの環境科学的研究、(9)生物地球化学、(10)同位体を利用した水・岩石相互作用の研究、などにまとめられ、極めて多岐に渡っている。個人的には、基本的な問題を精密に扱おうとする研究、新規の同位体系や新しい分光法を利用した研究、地下水の水質に関連する研究、などが見られたことが印象に残った。私が座長を行った西ベンガルのヒ素汚染に関する研究のセッションも、非常に活発な議論が行われた。一方で常連の参加者による家族的雰囲気を保っている面もみられたが、その分若手でこの分野を引っ張る人材がより多く必要のように感じた。なお口頭発表では、Power Point を用いた発表が私の印象では半数程度はあり、国内の学会よりも圧倒的に多かった。

私自身の研究報告は最終日に口頭で行った。内容は3価のランタノイド・アクチノイドの水圏環境での挙動に与える腐植物質との錯生成に関する研究で、以前より行ってきたこの種の研究の総括的な意味を込めた報告をした。特に、様々な元素を比較した結果3価のランタノイド・アクチノイドで特に腐植物質との錯生成の影響が大きいこと示した点、水圏で3価のランタノイド・アクチノイドの挙動を支配すると考えられる懸濁物質に吸着された金属化学種のスペーシエーションを分光学的手法で行った点、などでユニークな研究であると考えている。残念なことに質疑応答での質問は貰えなかったが、この理由として、(1)講演が最終日の最後から2番目で会場に人がまばらであったこと、(2)腐植物質を専門とする研究者が少なかったこと、が挙げられる。一方で、発表時間外で水圏環境科学や水・岩石反応を研究している研究者と議論できたことは有益であった。またアイダホ大学の S. A. Wood 教授からは、Royal Chemical Society, American Chemical Society などにより2000年から発刊(?)を開始した“Geochemical Transactions”という雑誌の宣伝を受けた。この雑誌は電子ジャーナルであり、<http://www.rsc.org/geochem> で詳細をみることができる。

最後に、このような貴重な体験が得られた今回の学会参加に際して鳥居基金による助成を頂けたことに関し、日本地球化学会の関係者各位に厚く御礼申し上げます。

ます。

2001年度第1回日本地球化学会評議員会議事録

日時：2001年2月17日(土) 12:30～18:30

場所：学士会館分館3号室

出席者：松久幸敬会長，野津憲治副会長，脇田宏監事，石橋純一郎，植松光夫，海老原充，蒲生俊敬，河村公隆，日下部実，齋藤和男，坂田将，田中剛，富樫茂子，中井俊一，長沢宏，野崎義行，野尻幸宏，日高洋，益田晴恵，松田准一，村江達士，吉田尚弘(以上評議員)

1. 2000年度第3回評議員会議事録の承認

2. 報告事項

2.1 庶務・幹事会(坂田評議員):【庶務一般】学会賞等受賞候補者推薦依頼公示(締切1.31),「地球化学」Vol.35の広告依頼(1.9)【文部省】大学評価・学位授与機構長より,大学評価専門委員および評価員の選考結果の報告受領(2000.10.1)分野別教育評価(理学)の専門委員として野津副会長が選出された【日本学術振興会】平成13年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(学術定期行物)申請(2000.11.24)平成12年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(学術定期行物)の実績報告書を提出(2.8)【研究助成等】(財)とうきゅう環境浄化財団(多摩川及びその流域の環境浄化に関する研究)の助成公示(締切1.15)(社)原子力学会バックエンド部会の若手研究者向け海外発表渡航費滞在費助成公示(締切2.10)2001年度第1回鳥居基金助成の募集(締切1.31)【学会会議】アンケート「登録学術団体における日本学術会議会員候補者等の選考過程について」に回答(1.31)【後援・共催等】「第38回理工学における同位元素・放射線研究発表会」(7.11～13,日本青年館)共催,「第4回国際土壌・地下水環境ワークショップ」(1.19,東京商工会議所)後援,「第6回地球汚染物質としての水銀に関する国際会議」(10.15～19,水俣市文化会館)協賛,「第4回国際ガスハイドレート会議」(2002.5.19～23,横浜シンポジウム)協賛,「第39回原子力総合シンポジウム」(5.15～16,内幸町ホール)共催,「第48回質量分析総合討論会(2001)」(6.18～20,東大安田講堂・山上会館)共催【献本】T. G. Spiro, W. M. Stigliani 著(岩田彦彦・竹下英一訳)「地球環境の化学」(学会出版センター)【幹事会】2001年2月

10日12:30～17:00に東京大学山上会館203室で開催した。出席者：松久会長，野津副会長，植松，海老原，蒲生，松田，吉田各幹事。第1回評議員会議事内容について整理。

2.2 会計(海老原評議員):2000年度の決算の状況について報告があった。

2.3 編集

2.3.1 GJ・出版関係(松田評議員):【GJ】Vol.34 No.5,6の出版が完了した。

2.3.2 地球化学(蒲生評議員):Vol.34, No.4の出版が完了した。

2.3.3 ニュース(中井評議員):No.163を発行した。

2.4 行事

2.4.1 2000年度年会(齋藤評議員):2000年度日本地球化学会年会の開催報告をニュースに掲載した。参加者総数400名。講演要旨のPDFファイルによる受付等,年会準備作業の電子化を試みた。

2.4.2 2001年度年会(長沢評議員):学習院大学百周年記念会館で,2001年10月18日(木)から20日(土)まで開催の予定。外国から招待した著名地球化学者による講演を中心とした特別講演会を企画する。従来の課題討論は企画しない。

2.4.3 2002年度年会(吉田評議員,代理:坂田評議員):九州圏国立大学関係者に可能性を打診中で,6月の評議員会で確定する。

2.4.4 2003年度年会(松久会長):Goldschmidt 2003との関連で,開催時期や内容について今後検討が必要。

2.4.5 2001年度地球惑星科学関連学会合同大会(吉田評議員,代理:坂田評議員):6月4日(月)～8日(金)国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催される。地球化学会から5セッションを提案。

2.4.6 Goldschmidt 2001(吉田評議員,代理:坂田評議員):2001年5月20日から24日まで,バージニア州 Hot Springs で開催。

2.4.7 GS Seminar(松久会長):2001年度年会に近い時期に,R. Clayton, K. O'Nions 両氏を講師として,Geochemical Society, Goldschmidt 2003組織委員会,日本地球化学会の共同開催でセミナーを開く予定。会場,日程等の詳細は検討中。

2.5 会員(植松評議員):6月末に会員名簿を発行するため,会員に名簿原簿葉書を発送する(3月末締切)。学会への要望を把握することと,学会活動の宣伝のため,葉書の裏にアンケートを載せる。

2.6 委員会

- 2.6.1 学会賞等受賞者選考委員会(海老原評議員)
2001年度の各賞受賞候補者として、柴田賞1名、学会賞6名、奨励賞6名、功労賞1名の推薦があった。
- 2.6.2 鳥居基金委員会(田中評議員): 海外渡航3件の応募があり、3月末までに審査を終了する。
- 2.6.3 地球化学書編集委員会(松久会長): 各巻の進捗状況にばらつきがある。培風館と打ち合わせを行い、3巻くらいを一括りにして出版し、全巻を1年以内に刊行するように、スケジュールを立て直した。
- 2.6.4 Goldschmidt 2003組織委員会(松久会長): 2回目の組織委員会を2月16日に開催した。LPIに業務委託(Web siteの立ち上げ、登録、講演要旨の受付、処理等)の可能性を打診中。学術会議の平成15年度共同主催国際会議に応募した。IUGG 2003の申請と競合する。東京工業大学の高橋栄一氏に組織委員会の委員となっていた。
- 2.6.5 電子出版化検討委員会(松田評議員): GJの過去の論文のCD-ROM化のため、コピーライト委譲確認作業中。
- 2.6.6 名誉会員推薦委員会(野津副会長): 今年度は名誉会員候補者の推荐を行わない。
- 2.6.7 将来計画委員会(野津副会長): 50周年記念事業の進め方(年会、ホームページ、GJバックナンバーのCD-ROM配布、「地球化学」特集号、GJ論文賞等)について意見交換を行った。次の評議員会で検討結果を報告する。
- ## 2.7 学術会議
- 2.7.1 地球化学・宇宙化学研連(田中評議員): 学術審議会で科研費申請の際の分科・細目の見直しはなかった。第18期第1回委員会が2000年11月16日に開かれた。細目「地球化学」の平成14年度科研費審査委員の推薦方法、及び第18期の活動方針について審議を行った。
- 2.7.2 海洋科学研連(野崎評議員): 第18期第1回委員会が2000年11月7日に開かれた。国際学術交流事業平成13(2001)年度代表派遣候補者、2002年SCOR総会開催準備等について協議した。
- 2.7.3 陸水研連(赤木会員、代理:坂田評議員): 第18期第1回委員会が2000年12月11日に開かれた。IAHSのInternational CommissionへのNational Correspondentsの推薦等について審議を行った。
- 2.7.4 鉱物研連鉱床学専門委員会(千葉会員、代

理:日下部評議員): 第18期第1回委員会が2000年11月22日に開かれた。科研費の分科・細目の再編等について審議を行った。

- 2.7.5 地球物理学研連惑星科学専門委員会(塚本会員、代理:坂田評議員): 第18期第1回委員会が2000年10月24日に開かれた。議事は、科研費実体調査について、科研費細目の見直しについて、など。

2.8 連絡会等

- 2.8.1 地球惑星科学関連学会連絡会(吉田評議員、代理:坂田評議員): 第22回連絡会が9月19日に開かれた。議題は2000 WPGM報告、2000年合同大会報告、2001年合同大会準備報告、IUGG準備報告など。

- 2.8.2 学校科目「地学」関連学会連絡協議会(植松評議員): 12月13日に開かれた。学会会員に含まれる学校教諭の人数について情報交換を行った。本学会の場合きわめて少ない。高校で地学教育を行わなくなっていることが減少傾向の一因。

- 2.8.3 理工学における同位元素・放射線研究発表会運営委員会(吉田評議員): 11月14日に開かれた。2001年研究発表会は7月11日(水)から13日(金)まで、日本青年館で開催される。

- 2.9 大学評価について(野津副会長): 大学評価・学位授与機構による大学評価が平成13年度から始まる。初年度は6大学が対象となり、5年間で全大学をカバーする。目標の設定と達成度の自己評価が求められる。評価の結果は公開される。

3. 審議事項

3.1 会員の異動

- 3.1.1 入退会者の承認: 2000年9月1日から2000年12月31日までの入退会者を以下のとおり承認した(敬称略)。

【入会】

正会員8名(一般正会員5名(うち海外正会員2名)・学生3名)、賛助1件

2156 S ACHY Guillaume
室蘭工業大学大学院工学研究科

2157賛 鈴木利幸
(前)オーレック代表取締役

2158 大江俊昭 OHE Toshiaki
東海大学工学部原子力工学科

2159海 JAYANTA Kumar Pati
Dept. of Earth & Planetary Scis., Univ. of

- Allahabad
- 2160 S 奴賀義隆 NUGA Yoshitaka
東北大学大学院理学研究科
- 2162 角森史昭 TSUNOMORI Fumiaki
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設
- 2163 S 半田智子 HANDA Tomoko
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設
- 2164海 AKA FESTUS Tongwa
Antenna for Geophysical & Volcanological Res., Inst. for Mining & Geologica Res.
- 2165 白井知子 SHIRAI Tomoko
宇宙開発事業団地球観測データ解析研究センター

【退会】

- 1名 (一般正会員1名)
村山定男

この結果2000年12月31日現在の会員数は以下のとおりとなった。

	正会員 (一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2000.9.1	1020	(892)	(121)	(7)	18	11	1049 (49)
入会	8	(5)	(3)		1		9 (2)
退会	1	(1)					1
変更	0	(+4)	(-4)				0 (+2)
推挙							
除籍							
2000.12.31	1027	(900)	(120)	(7)	19	11	1057 (53)

- 3.2 2002～2003年度役員選挙管理委員の選出：2002～2003年度役員選挙管理委員として、海老原充，中井俊一（委員長），吉田尚弘各評議員を選出した。
- 3.3 平成14年度科学研究費審査委員候補者の選出：投票の結果，以下の候補者を選出した（敬称略）。
【細目「地球化学」第1段審査委員候補者】(大気水圏生物圏関係)河村公隆，蒲生俊敬，植松光夫，野崎義行，野尻幸宏，益田晴恵，佐竹洋；(固体地球関係)海老原充，田中剛，佐野有司，益田晴恵，清水洋，中井俊一，長尾敬介，野津憲治，松田准一
【分科「地球科学」第2段審査委員候補者】(大気水圏生物圏関係)野崎義行，河村公隆，日下部実；

(固体地球関係)松田准一，清水洋，野津憲治，田中剛

推薦依頼が来た時点で，会長・副会長が有資格等の条件を考慮して，候補者の中から本学会の推薦者を決めることを承認した。

- 3.4 Goldschmidt 準備基金の設立：故立本光信先生のご遺族から学会に寄付があった。黒田基金，学会からの積立金（2000年度と2001年度においてそれぞれ30万円）と併せて Goldschmidt 準備基金を設立し，Goldschmidt 2003の開催準備に充てることを承認した。

3.5 IUGG 2003札幌大会活動支援について

- 3.5.1 共催団体としての参加：本学会が IUGG 2003 札幌大会の共同開催学会となることを承認した。

- 3.5.2 準備金の拠出：IUGG 2003札幌大会の準備活動を支援するため，2口4万円（1999年度と2000年度分）を拠出することを承認した。

- 3.6 公開講演会のあり方：まず年会の開催地に公開講演会を企画する希望があるか確認する。希望しない場合は年会開催地以外から希望を募る。科研費「研究成果公開発表(B)」を申請し，申請が認められない場合は学会が補助する。

4. 次回以降の幹事会，評議員会の日程

2001年6月2日(土) 幹事会（学士会館分館）

2001年6月9日(土) 評議員会（東大山上会館）

第18期第2回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録

日時：2001年5月10日(木) 13:30～16:30

場所：日本学術会議第4部会会議室（6階）

出席者：田中剛委員長，青木謙一郎，海老原充，日下部実，清水洋，田結庄良昭，中澤高清，中村栄三，藤原顕，松田准一，各委員

報告事項

1. 学術会議関係（青木委員より）

- 1.1 連合部会（2001年2月15日開催）

4月開催の第135回総会の議題についての報告を行った。

- 1.2 第4部会（2001年2月15日開催）

(1) 平成14年度代表派遣旅費配分額の決定および派遣実施計画案の作成，田中委員長の2001 Goldschmidt 国際会議派遣が承認された。

(2) 平成15（2003）年度開催国際会議の共同主催申

請について

10件の会議申請があり、8件が承認されることになっている。申請された中に、地球科学関係では「第23回国際測地学・地球物理学連合2003年総会」と「第13回ゴールドシュミット会議」が含まれている。

- (3) 研連付置の「小委員会」の設置申請について
地質研連付置の「地質年代小委員会（兼岡一郎委員長）」を含む設置申請が審議・承認された。

- (4) 対外報告書の承認

「蛋白質の構造・機能研究の総合戦略の提案」、
「国立大学臨海実験所等の再編成に関する提言」の討議を行った。

- (5) 科学研究費補助金分科細目別対応研連についての最終確認

細目「地球化学」の窓口研連は、「地球化学・宇宙化学研連」。

- (6) 日本学術会議会長から“Science”に対する抗議書簡の送付

セレラ社の人間のゲノム研究の論文掲載許可に関して、Science誌に2000年12月27日付けで抗議書簡を送付した。

1.3 第135回総会（2001年4月25、26日開催）

以下の9つの提案事項について審議し、承認した。

(1)国際問題に関するインターアカデミーパネルへの加入、(2)国際北極科学委員会への加入、(3)日本学術会議の部会等の公開に伴う関係規則等の一部改正、(4)運営審議会付置「日本の計画委員会」の設置、(5)運営審議会付置「新しい学術体系委員会」の設置、(6)運営審議会付置「日本学術会議の在り方に関する委員会」の設置、(7)運営審議会付置「第18期評価委員会」の設置、(8)「農業・森林の多面的機能に関する特別委員会」の設置、(9)「21世紀における人文・社会科学の役割とその重要性」(声明)

1.4 第4部会（2001年4月24、25日開催）

科学研究費補助金の分科細目見直し案について複合領域についての新しい見直し案が提案された。従来は分科・細目に区分されていたが、領域・分科・細目の3区分となっている。情報学、生命科学、環境学、安全学、広域学、資源エネルギー学と新技術の7領域となっている。

2. 第1回理学総合連絡会議（田中委員長より）

2000年12月25日開催。議題は次のとおり。(1)第4

部会近況報告、(2)研連の見直し、(3)科研費分科・細目の見直し。

3. 第1回地質科学総合研究連絡委員会（田中委員長より）

前期からの申し送り事項を確認した。申し送り事項の項目は次のとおり。(1)地質科学総合研連の任務と活動について、(2)本研連付置応用地質および水文地質の両小委員会について、(3)研連組織の見直しについて、(4)地質科学関連学協会連合について、(5)科学研究費審査委員の推薦業務について、(6)地質科学教育に関するシンポジウムについて。

4. 雑報告（田中委員長より）

- (1) 研連活動報告を3月9日に提出した。

- (2) IAGC との関係状況報告

- (3) 第16期地球化学宇宙化学研連で発表した対外報告「地球環境に関わる地球化学の推進について」の影響調査報告書を提出した。(2001年4月18日)

- (4) Goldschmidt 国際会議準備状況

平成15(2003)年度開催国際会議の学術会議共同主催は、不採択となった。

審議事項

1. 平成14年度科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦

- (1) 推薦依頼：本研連は分科「地球科学」の2段審査委員1名、細目「地球化学」の第1段審査委員3名のそれぞれの2倍の審査委員候補者の推薦を行う。昨年と同じく18学協会へ推薦依頼を行った。その際に、日本地球化学会には、第1段審査委員候補6名、第2段審査委員候補2名を、それ以外の学協会には第1段審査委員候補1名、第2段審査委員候補1名の推薦を依頼した。第1段審査委員候補は、14学協会から19名、第2段審査委員候補は、12学協会から13名の推薦を得た。

- (2) 第2段審査委員候補の選考：全候補者を分野A（固体地球関係）とB（大気・水圏・生物圏関係）に分け後に、従来の投票手続きにしたがって候補者を選出し、2名を順位を付けて推薦することとした。選出にあたっては年齢や同一の機関に片寄らないなど、審査委員候補者の推薦に係る留意事項に従った。

- (3) 第1段審査委員候補者の選考：日本地球化学会から推薦された候補者のみ、学会の推薦順位に従

い、上位と下位に分けた後、全候補者を分野 A (固体地球関係) と B (大気・水圏・生物圏関係) に分け、上位 3 名の候補者は従来の投票手続きに従って候補者を選出した。下位 3 名の候補者は、分野 A, B 別に一括して選出した。選出にあたっては、審査委員候補者の推薦に係る留意事項に従った。以上の結果選ばれた第 1 段審査委員候補者 6 名に順位を付けて推薦することとした。

2. 第 18 期における活動方針について意見交換を行い、次の事項などが話題となった。(1) アジア地域における地球化学分野の国際交流。(2) 地球惑星科学分野の環境学への再編成が見られる中で、再編成後の地球化学分野とカリキュラムの位置付けと各大学におけるその実態調査。

次回、第 18 期第 3 回の委員会は 2001 年 11 月 8 日に開催予定である。

以上

第 18 期海洋科学研究連絡委員会 (第 2 回) 議事録

日時：平成 13 年 3 月 6 日(火) 13 時 30 分～16 時 30 分

出席者：西田篤弘、斎藤常正、谷口旭、山口征矢、松山優治、石井春雄、角皆静男、伊藤絹子、松田治、伏見克彦、花輪公雄、前田明夫、瀬岡和夫、古谷研、井内美郎、遠藤昌宏(オブザーバー)

欠席者：西田周平、寺崎誠、杉本隆成、平啓介、野崎義行、松永勝彦、友定彰

場所：日本学術会議

・第 1 回議事録について

第 1 回海洋科学研究連絡委員会(平成 12 年 11 月 7 日開催)の議事録原案は、事前にメールで回覧・修正済みであるが、本委員会で改めて承認した。

・報告事項

1. 学術会議の動き報告(谷口委員長)

前回の委員会から本日までの、おもな動きについて報告があった。

- (1) 本研連から申請していた代表派遣旅費 1 名分が採択された。
- (2) 2002 年 SCOR 総会への財政支援は既に締め切りのため、申請できなかった。分担金増申請は翌

年度実現に向けて検討されている。

- (3) 2004 年度の共同主催国際会議の募集締め切りは 2001 年 12 月なので、希望があれば申し出てほしい。
- (4) かねて申請していた「海洋研究・教育のための船舶運営機構に関する検討小委員会」の継続設置が承認された。
- (5) 文部科学省科学研究費補助金の見直しが行なわれているが、その過程のひとつとして、複合領域に分科細目「海洋科学」の新設を要望した。

・協議事項

1. 「海洋科学研究・教育のための船舶運営機構に関する検討小委員会(略称：練習船小委)」の対外報告案について

花輪小委員会委員長より、小委で作成した対外報告案文「海洋科学研究・教育のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」に関して説明があった。骨子は、まず、海の科学研究の重要性が今日ますます増大していることを指摘し、次いで、その基盤設備である船舶不足を訴えるとともに、一方には減船されようとしている練習船があることを示し、それを活用することを提案するものとなっている。最後に提案を次の 4 項にまとめてある。

- (1) 利用可能な船舶の充実のため、現在の練習船の減船・小型化は避ける。
- (2) 練習船は、当面は現在所属している大学に引き続き設置し、全面的な利用を可能にする。
- (3) 練習船は、海洋に関わるすべての学問領域の学部から大学院教育および研究に利用する。
- (4) 練習船群の運航を効率よく行なうための組織体制を整備する。

この案について議論をかさねた後、本委員会の意見を次のように集約した。

提案を大筋で承し、必要な字句、文言の修正と、内容の整理をすることとした。特に水産系大学練習船が廃止されると今日までの海洋研究体制が崩壊してしまうこと、現行の練習船に新しいタイプの「教育・研究船」としての機能をもたせていくことの重要性を明瞭に示すことが望ましいとされた。

この意向を汲み入れて花輪小委員会委員長が修正を行い、できれば 4 月 24 日開催の複合領域研連運営協議会に提案することとした。そこで承認が得られれば、5 月の学術会議運営審議会に提出することに

なる。

2. 2002年 SCOR 総会開催準備について

SCOR 総会準備状況について角皆委員より説明があった。開催時期は2002年10月1日～5日とし、札幌市で開催される日本海洋学会秋季大会との合同開催とする。4つのセッションを考えており、それぞれコンピナーを決めて具体的な計画を立てる予定である。開催経費は海洋学会秋季大会程度と考えており、日本海洋学会に協力を要請していく予定である。

3. 科研費複合領域分科・細目「海洋科学」新設の申請について

文部科学省では科研費の在り方に関する大幅な見直しが進んでおり、複合領域に分科細目を新設することに積極的な雰囲気を感じられる。ただし、新設するにあたっては複数の部からの同意が得られること、また、複合にとどまらず総合という観点で条件になるらしいことが報告された。それを受けて、必要とされる要望理由書とキーワード表を3月10日までに提出することとした。谷口研連委員長のキーワード表原案に対して、種々の意見が提案され、これまでに寄せられたキーワードとあわせながら、再度原案を作り、メールで承認することとした。

4. 科研費の審査員の推薦について

今期の委員会では科研費審査委員の推薦方法のルールを作成してゆくことになっているが、近い将来、科研費の在り方が大幅に変更になる可能性が高いので、ルール作りについては時間をかけることとした。今回は5月末までに候補者の推薦をしなければならないこと、本研連推薦委員が新たに任命される可能性が低いことなどを考慮して、今回の推薦を委員長に一任することを了承した。

今回は6月12日に開催の予定（議事録作成・伊藤絹子）

第18期海洋科学研究連絡委員会 （第3回）議事録

日時：平成13年6月12日(火) 13時30分～16時30分

出席者：西田篤弘，斎藤常正，谷口旭，松山優治，寺崎誠，石井春雄，角皆静男，伊藤絹子，野崎義行，友定彰，花輪公雄，前田明夫，古谷研，井内美郎，滝沢隆俊（オブザーバー）

欠席者：山口征矢，西田周平，杉本隆成，平啓介，松田治，伏見克彦，松永勝彦，瀬岡和夫

場所：日本学術会議

第2回議事録について

第2回海洋科学研究連絡委員会（平成13年3月6日開催）の議事録案は、事前にメールで回覧し、必要な修正を施したうえで、本委員会で承認した。

報告事項

1. 海洋科学技術センターからのオブザーバーは、遠藤昌宏氏の転出にともない、滝沢隆俊氏へ交代した。

2. 学術会議の動きに関する報告（谷口委員長）

(1) 前回の委員会から本日までの、学術会議のおもな動きについて報告があった。

(2) 学術会議総会に対して本研連の活動報告を行った。主な報告内容は「海洋科学の教育と研究のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」の対外報告案を完成したこと、文部科学省科学研究費補助金について、複合領域に分科細目「海洋科学」の新設を要望していること、2002年10月にSCOR総会を札幌で開催することを決定した、他である。

3. 「海洋科学の教育と研究のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」の対外報告について花輪練習船小委委員長より、対外報告「海洋科学研究・教育のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」に関して、以下のような報告と説明があった。

4月24日開催の複合領域研連運営協議会に提案して承認が得られたので、5月14日の運営審議会に上提した。運審委員との間で様々な質疑応答を経て、若干の字句の訂正追加の上で承認された。その際、具体的なデータを示す資料を添付した方がよいという意見が多かったので、いくつかの参考資料を作成添付し、記者懇談会において説明をした。後に読売新聞（5月31日）にこの件に関する記事が掲載されたことの紹介があった。

4. SCOR 関連の動きについて

2001年10月の執行理事会の案内と2002年に札幌で開催する予定のSCOR総会準備状況について、角皆委員（SCOR副会長）より以下のような説明があった。

今年10月29, 30日アルゼンチンにおいて SCOR 執行理事会が行なわれる予定である。そこで述べべき意見や希望があれば申し出てほしい。

2002年の SCOR 総会は、10月1日から5日まで札幌で開催される日本海洋学会秋季大会と並行して行なわれる予定。4つのセッション（物理、化学、生物、地学）のコンピーナーの依頼を進めているところである。今回は、若手研究者も含め、日本の最前線の研究をできる限り多く発信できるようにしたいと考えている。

5. IOC 関連の動きについて

IOC 関連の動きについて、寺崎委員より紹介があった。現在、平委員が日本代表として、国連海洋法条約に関連した事項をおもな議題とする今回の執行理事会に出席している。

・協議事項

1. 「海洋科学研究・教育のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」の対外報告の、今後の取り扱いについて

対外報告案が学術会議運営審議会で承認されたので、今後は関係各機関への広報に努力する必要がある、その具体的な方法について話し合わせ、次のような結論を得た。

“海の研究”に全文を掲載してもらう。また、関連する学会の編集委員会にも掲載の依頼を行う。必要なデータ等を付属資料として印刷した冊子体をつくり、ひろく関係機関へ配布する。主要な機関に対しては、冊子体を自参して口頭説明に当たる。そのため、7月中旬までに1,000部くらいを印刷することとした。

2. 科研費審査員の推薦について

科研費複合領域細目「環境保全」の1段審査委員候補者1名を急ぎ推薦することになった。前回の候補者を勧奨した上で、委員長から2名の候補者に順位をつけて推薦することとした。

次回は11月6日(火)に開催の予定（議事録作成・伊藤絹子）

海洋科学研究連絡委員会対外報告

「海洋科学の教育と研究のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」

地球環境と食糧をめぐる問題は、ますます深刻化しつつある。この二つの問題を同時に解決する鍵を秘めている唯一の存在としての海洋に対する期待が、世界的に高まっている。地球環境の科学や水産学などを含む広義の海洋科学を中心とする大規模な国際協同研究が次々と行われているのは、その現われである。こうした問題の最終的解決には長い年月を要することから、米国や韓国のように、次世代を担う海洋科学や海事学の専門職育成に、特に力を注ぐ国も出てきた。

わが国においても、海洋科学研究をより一層推進すると同時に、学部および大学院レベルでの実践的かつ総合的な海洋科学の教育を通して、21世紀の諸問題解決に敢然と取り組む人材を育成することが急務である。現在、その実現を目指す大学も増えているが、それらの需要を充足させるだけの海洋科学の教育と研究のための船舶が不足している。

一方、国立大学水産学部に設置された練習船の一部は、漁業船舶従事者の需要が減少したために特設専攻科が廃止されることを理由に、減船あるいは小型化されようとしている。これらの練習船を、現在所属している大学学部のみならず、あらゆる大学において、海に関わる科学の実習教育と研究に「教育・研究船」として広く活用することを目指した運用への転換を提言する。

1. はじめに

今日、人類は、地球温暖化に象徴される地球環境の人為的壊変の問題、人口の爆発的増加による食糧確保の問題、社会の持続的発展を保証する資源エネルギー確保の問題等々、地球規模での未曾有の困難に対峙するに至った。いまこそ人類の英知を結集し、これらの諸問題を解決する方策を追求しなければならない。

地球表面の7割を占める海洋は、地球環境形成に主要な役割を担い、食糧や鉱物資源の開発利用においても大きな可能性を秘めている。しかし、海洋に対する人類の知識はまだまだ乏しい。この、近くで未知なる海に、より一層精密かつ高度な科学のメスを入れることが、人類の差し迫った課題である。

例えば、地球温暖化問題は社会的関心事となり、1990年にはいわゆる地球環境サミットが、1997年には京都会議(CoP3)が開催された。これらの会議では、地球環境に関する二大国際協同研究である WCRP

(世界気候変動国際協同研究計画)とIGBP(地球圏生物圏国際協同研究計画)が得た最新の研究成果をもとに、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)が作成した報告書が科学的根拠として使われている。この報告書の中に占める海洋研究からの知見は、きわめて大きい。

ひるがえって、わが国における「海の理解」に向けた教育と研究の現状に目を転ずると、学部および大学院学生や教員、また関連の研究機関における研究員などの教育・研究環境についての問題が山積している。とりわけ大きな問題は、海洋の研究はもとより、その基本となる実践的な海洋科学教育に欠くことのできない、海洋観測と現場実験の機会が不足していることである。この問題は主として、海の理解という差し迫った課題を前に、基盤施設としての船舶が不足していることに起因している。

現在、船員を養成するための特設専攻科を有する国立大学水産学部には、その教育のための大型の練習船(以下、単に練習船と呼ぶ)が配置されている。これらの練習船は、漁業船舶従事者の養成と同時に、海洋科学の教育と研究にも大きな役割を果たしてきた。しかし、近年の漁業ならびに海上運輸をめぐる情勢の変化に伴う漁業船舶従事者の需要減に対応して、複数の練習船が減船や小型化されようとしている。このような状況に鑑みると、所属大学学部のみならず全国の大学における海洋科学の教育と研究に広く活用することを目指して、現在の練習船運用体制の抜本的な改善を早急に計る必要があると結論される。

これまでも、海洋研究船の絶対数不足を憂慮した第14期海洋科学研究連絡委員会は、関連する地球物理学、海洋物理学、水産学の3研究連絡委員会とともに、対外報告「わが国の海洋研究船の充実について」を公にした。その後、第15期、第16期、第17期においても、引き続き同様の観点から、練習船の転用をも視野に入れた検討を重ね、また関連学協会等とシンポジウムを共催するなどして、海洋科学の教育と研究に資するための現有船舶充実利用の方途を探ってきた。近年とりわけ練習船をめぐる情勢の変化が予想されるに至り、第18期海洋科学研究連絡委員会は、過去の検討を踏まえて、海洋科学の教育と研究のための船舶不足と練習船の将来のあり方に関する議論を深めた結果、

本報告書を呈することとした。

2. 海洋科学の教育と研究における船舶の必要性

わが国の国土面積は約38万平方キロメートルにすぎないが、海岸線は米国の1.5倍の約3万キロメートルもあり、排他的経済水域にいたっては世界第6位の約450万平方キロメートルにも達している。わが国においては、水産業や海運業など海洋産業の重要度はきわめて高く、また、他国の追従を許さぬほどめざましく発達している。わが国ほど海洋の恩恵を享受し、また海洋への依存度を高めている先進国はないといっても過言ではない。したがって、世界のトップクラスの経済力をもつわが国が、海洋科学の教育と研究にリーダーシップを発揮することは、国際的な責務である。

さて、海は暖められれば暖められるほど成層が強くなり、海水は混ざりにくくなる。また、海は常に大気からの強制を受けて変動している。その結果、海は海域毎に異なる様相を呈する。したがって、その全体像を把握するためには多くの観測点で頻りに調査する必要がある。すなわち、海の科学は、高精度の観測装置がどこかに一つあって、1回計測すればよいという「集中かつ短期型の巨大科学」ではなく、海をいたるところでかつ長期に観測しなければならない「分散かつ長期型の巨大科学」なのである。それゆえ、多国間で適切に調整された国際協同研究の実施が重要となる。

実際、地球温暖化、気候変動、海洋汚染、それらの海洋生態系への影響などの諸問題に関して、次々と国際協同研究計画が実施されている。最近の主な例としては、WCRPの副計画としてのTOGA(熱帯大気と全球海洋実験計画)やWOCE(世界海洋循環実験計画)、さらにはCLIVAR(気候変動特性と予測可能性研究計画)が、また、IGBPでは、重点計画としてJGOFS(世界海洋フラックス合同研究計画)、GLOBEC(全球海洋生態系動態研究計画)、さらにはSOLAS(海洋大気間物質交換研究計画)などがある。また、海洋のリアルタイム・モニターと予測を目指すGOOS(世界海洋観測システム)が進行中である。さらに、海洋現場における船舶などの観測資源不足に対処するため、POGO(全球海洋観測に対するパートナーシップ)と呼ばれる国際的ネットワークも活動を始めている。これらの研究計画はいずれも、海洋現場

での観測研究を主要な要素としている。経済先進国であるわが国は、これらの計画において相応の貢献をすることが強く期待されている。そして、これら国際協同研究計画などの海洋研究において、わが国がリーダーシップをとるためには、優秀な人材と十分な数の船舶が必要不可欠である。

現在、わが国で海洋の研究を主たる目的として運航されているのは、東京大学海洋研究所の共同利用研究船「白鳳丸」と「淡青丸」の2船、および海洋科学技術センターの「みらい」に限られている。一方、水産系学部練習船や東海大学の船は、学生の実習教育とともに海の調査研究を行ってきた。また、気象庁の観測船、水産庁や海上保安庁水路部の調査船、金属鉱業事業団の探査船、「みらい」以外の海洋科学技術センター所属の船も、他に主たる業務を持ちながら海洋研究に利用されてきた。しかしながら、研究観測の需要がきわめて多いために、1回の航海に多くの研究者が混乗せざるをえず、それぞれ割り当てられた少ない日数内に完了しうる研究課題を選択しているのが現状である。このため、海洋科学にたずさわる研究者は、研究調査船が1隻でも多くなることを切に願っている。

また、海洋科学の研究者養成と同時に、海洋の調査や資源開発、海洋構造物の構築などに関わる現業機関や民間企業で働く技術者、および海洋関連の行政において活躍する専門職等の人材養成も切実な問題である。しかし、これらの人材を海洋現場で実践的に育成するための教育設備や体制は、未だにきわめて不備であることを指摘しなければならない。

近年、科学技術の高度化にともなって、民間企業から大学教育の質の高度化が要求され、大学院教育の比重が年々大きくなっている。幾つかの大学で行われた大学院重点化は、海洋科学や地球環境科学領域における大学院学生数の激増をもたらした。しかしその一方で、海洋現場における実習教育や研究の機会を大学院学生に保証するための船舶の整備充実はなおざりにされたままである。そのため、教育と研究の多くが、計算機を利用したヴァーチャルな世界での海洋学に向いつつあり、将来の海洋研究を担う人材の養成のあり方としてバランスを欠いたものになっている。

大学ならびに大学院教育における海洋科学の教育と

研究に必要な船舶の位置づけは、大きく二つに分けられる。一つは、大学ならびに大学院で海洋に関わる科学を学ぶすべての学生に、実際の海を科学的に知ることを体験させるための施設という位置づけである。すなわち、海洋に関わる研究者や技術者の知識を高め、科学的経験の底辺を広げようとするものである。もう一つは、大学院においてその分野での先端的研究を目指す研究者の養成という側面から、学位取得に向けた研究の場を与え、近い将来世界をリードする人材を養成するための施設としての位置づけである。われわれが期待する新しいタイプの船とは、大学および大学院教育施設として、海洋科学の実地研修を行うと同時に、海洋研究の進展にも寄与することができる「教育・研究船」である。

3. 水産系大学練習船の現状と今後

水産系大学練習船は、漁業生産の拡大が戦後復興の主力を担うとの時代的要請を受けて、漁業生産技術者の養成を目指して設置された。さらに、大型漁船運航に必要な海技免状取得のための特設専攻科が、東京水産大学および北海道大学、長崎大学、鹿児島大学の各水産学部 に設けられた。これらの施策により、遠洋漁業を中心とした日本漁業が、戦後復興に重要な役割を果たしたことは衆知の事実である。教育施設としての練習船設置の法的背景は、昭和31年の文部省令第28号第39条（附属施設）の指定と、昭和40年改正農学関係学部設置基準要項第十の附属施設別表第4（練習船）にある。

練習船は、これまで船舶従事者養成の目的のもとで、航海実習、漁労実習、海洋実習、漁業調査実習を行ってきた。しかし一方では、種々の海洋観測研究にも利用され、他省庁の観測調査船とともにわが国における国際協同研究遂行の中心的役割を果たしてきた。とりわけ、かつてのIGY（国際地球観測年）、NOR-PAC（日米加北太平洋一斉調査）、南極地域観測事業、IIOE（国際インド洋調査）、CSK（国際黒潮共同調査）、IBP（国際生物学計画）などで、大型練習船が果たした国際貢献はきわめて大きいものであった。

また、各大学練習船は独自に、官庁における観測調査船の活動範囲を越えた海域において、定められた点や線に沿った定期的研究観測を長年にわたって維持してきている。そこで得られた種々の資料は、海洋や気

候、そして生態系や水産資源の長期変動を記録するものとして、世界中の研究者から注目を集め、また高い評価を得ているところである。すなわち、練習船という貴重な資源を、実習教育のみならず研究にも大いに活かしてきたのである。また、このような研究を融合した教育資源の活用が、多くの科学的成果を挙げただけではなく、今日国内外で広く活躍している多数の海洋科学者を育成してきたことは、特筆すべき事実である。

しかしこの間、沿岸国における海洋の生物や鉱物資源をめぐる権益意識の昂揚と排他的経済水域の設定によって、公海は著しく狭小化した。そのため、多くの海域で日本漁船の活動が制限され、わが国による遠洋漁業の衰退が明らかになってきた。こうした産業構造の変化に伴い、かつては進学希望者が殺到した特設専攻科も次第に定員割れを起こす事態に陥り、東京水産大学を除く3大学で特設専攻科の廃止が決定されるに至った。そのため、近い将来大型練習船を廃船や小型化する計画が進行しつつある。

例えば、わが国のJGOFSに対する国際貢献の一環として行われた戦略的基礎研究KNOT（共同北太平洋時系列観測）において、中心的な役割を果たした北海道大学水産学部練習船「北星丸」も、平成13年度国家予算では廃船することが前提とされている。しかし、この例からも理解されるように、海技免状取得のための教育施設としての役割の終了をもって直ちに練習船を廃止することは、適切な選択とは言えない。なぜならば、練習船は通常の観測設備はもとより、多様な漁労設備や生物採集機器を備えており、また乗組員はそれらの操作に熟練した専門家集団であり、これらの練習船を海洋科学の実習教育と研究とに活用できれば、わが国は世界に類を見ない先端的な海洋科学を展開し、国際的な期待にも応えることができるからである。わが国は、今後ますます重要度を増す総合科学としての海洋科学における教育と研究、および国際貢献のために、現練習船を「教育・研究船」と位置づけて広く活用するべきである。

4. 提言

わが国における海洋科学の教育と研究が直面している問題を検討した結果、来たるべき時代に海洋科学を健全に発展させ、社会からの付託に応えるためにはさ

らに多くの船舶が必要なので、現在の練習船を、学部や大学院における海洋科学に関する教育および研究のための「教育・研究船」として広く活用するべきであるとの結論に達した。その実現のために、以下の具体案を提言する。

- (1) 教育と研究に利用可能な船舶の充実のため、現在の練習船の減船や小型化を避ける。
- (2) 現練習船を「教育・研究船」として、現在所属している大学に当面引き続き設置し、全国的な利用を可能にする。
- (3) 「教育・研究船」は、海洋に関わるすべての学問領域の、学部および大学院の教育と研究に活用する。
- (4) 「教育・研究船」群の運航を効率良く行うための組織体制を整備する。

〔参考資料〕

本報告に至るまでの調査検討過程を示す、おもな資料を掲げる。ページ数が多いので、資料そのものは添付しない。

1. 日本学術会議海洋科学研究連絡委員会他、1995：「わが国の海洋研究船の充実について」．日本学術会議報告，平成3年5月21日，6 pp.
2. 浅井富雄（編），1997：「海洋研究船」．月刊海洋，1997年2月号，通巻320号，57-133．
3. 花輪公雄（編），1999：「水産系大学学部練習船現状と将来」．月刊海洋，1999年1月号，通巻343号，3-58．
4. 野崎義行（編），2000：「21世紀の海洋研究と教育体制」．月刊海洋，2000年1月号，通巻355号，3-62．
5. 花輪公雄，1999：「海の科学と教育の振興に向けて“水産系大学学部練習船の現状と将来”シンポジウム」．学術の動向，4，60-62．

第18期第2回日本学術会議陸水研究連絡委員会

日時：平成13年3月7日(水) 13：30～15：30

場所：日本学術会議第4部会議室

出席者：赤木，小林，熊谷，佐倉，椎葉（委員長），砂田，高野，谷，吉越の各委員

議事

1. 自己紹介

オブザーバーの先生方に開催案内が郵送されていないため参加がなかった。次回から連絡が必要であることを確認した。

2. 委員長からの報告

・日本学術会議理学総合連絡会

研連の見直しについて、科研費分科・細目の見直しについて、報告があった。陸水研連からの人員の削減は難しいこと、地物研連の専門委員会として定員をそのまま確保することについて議論されたが、当面、第4部全体の動きを見て、陸水研連の多様性や役割を主張していくことになった。科研費分科細目の見直しは、従来のままになりそうであることが紹介された。

・地球物理学研究連絡委員会

理学総合連絡会以外の話題では、IUGG 2003の準備状況について報告があった。

・IAHS 国内委員会

「IUGG 2003の日本開催のための貸付金以来について」を各学会に配布することになった。

3. 活動の計画

1) 2003年のIUGGで、陸水研連から「東アジアにおける水環境の危機」といようなワークショップがシンポジウムを提案してはという意見が熊谷委員からあった。

研連の各学会で、これについての是非、参加する場合各学会から世話人を推薦していただくことになった。4月15日までに熊谷委員に返事し、熊谷委員が各学会の世話人と検討し、IAHS 2001の開催時に申請書を提出する予定となった。

2) 2002年に各学会の合同シンポジウムを開いてはどうか、という提案が委員長からあった。このシンポジウムについて、各学会ではどう考えるか検討していただき、次回陸水研連でテーマや講演者を決めることになった。

日本学術会議鉱物学研究連絡委員会 鉱床学専門委員会 第18期第2回議事録

日時：平成13年3月5日(月) 13:30~16:30

場所：日本学術会議6階第5部会会議室

出席者(五十音順): 石渡明, 上野宏共, 梶原良道(委員長), 千葉仁, 根建心具, 溝田忠人

欠席者: 青木謙一郎, 浦辺徹郎, 丸山孝彦

1. 報告

(1) 前回議事録の確認

第18期第1回鉱床学専門委員会(11月22日開催)の議事録が席上配布され、確認された。

(2) 分科・細目について

科研費の分科・細目の見直しについて、梶原委員長から「各ワーキング・グループから提出された案」(「部別」と「系別」の2種類)が示され、分科(系別の場合は分野と分科両方)の名称を従来の「地球科学」から「地球惑星科学」に変更すること、細目の「地球物理学」を「固体地球惑星物理学」に、「地球化学」を「地球宇宙化学」に変更すること、また理科教育は従来生物分科に属していたが、新案では「理学高等教育」という独立の分科にする、などの案について説明があり、若干の質疑があった。

(3) 研連統廃合について

学術会議の研究連絡委員会(研連)の見直しについて、梶原委員長から「世話担当研究連絡委員会一覧(第18期)」の資料が配布され、委員数の削減と統廃合の見直しについて報告があった。

(4) 科研費審査方式について

細目「岩石・鉱物・鉱床学」の審査員の決定方法を改善するための、青木謙一郎会員による「試案」が梶原委員長から紹介され、その試案についての詳しい説明と、それに対する質疑応答があった。

2. 議事

(1) 今期の鉱床学専門委員会の活動方針について

A. 梶原委員長から、研連統廃合問題に対する、本専門委員会としてのスタンスに関する問題提起があり、これについて議論した。「鉱床学の振興」という観点から、この問題に対処すべきだという意見があった。

イ. 第17期からの引継ぎ事項である、本専門委員会でシンポジウムを開催することについて、資源地質学会の50周年記念事業として6月に行われるシンポジウムを共催する可能性や、独自のシンポジウムを開く場合の手続きと財源、及び広く一般の興味をひくテーマなどについて議論した。

ウ. 一部の委員から、第4部の研連の中には既にホームページを開設しているところがあり、製作中や計画中のところがあることが報告され、鉱物学研究連絡委員会または鉱床学専門委員会として、ホームページを設ける必要があるかどうかについて議論し

た。

(2) その他

次回委員会は、鉱物学研究連絡委員会と合同で、5月21日(月)の13:30より行うこととした。

同位体地球化学ショートコースのお知らせ

Geochemical Society Short Course on

Isotope Geochemistry

主催：The Geochemical Society

共催：日本地球化学会，2003年ゴールドシュミット国際会議組織委員会

後援：セキテクノトロン株式会社

2003年9月7日～12日の日程で、くらしき作陽大学(岡山県倉敷市)を会場に、アジアで初めての Goldschmidt Conference (国際地球化学会年会)が開催されます。この会を主催する The Geochemical Society と日本地球化学会，2003年ゴールドシュミット会議組織委員会が協力し、本年秋に同位体地球化学ショートコースを開催します。講師として同位体地球科学の最高権威である Robert Clayton 教授(シカゴ大学)，Keith O'Nions 教授(オックスフォード大学)をお招きします。時間的にゆとりのあるプログラムを編成し、大学院生，若手研究者(学部学生も歓迎)から一般研究者にもわかりやすく，なおかつ第一線の研究者にとっても刺激的なコースを目指します。ふるってご参加ください。

講義内容

Prof. Robert Clayton (University of Chicago)

- (1) Theory and history of stable isotope methods
- (2) Applications to problems in terrestrial geochemistry
- (3) Applications to problems in cosmochemistry

Prof. Keith O'Nions (Oxford University)

- (1) Isotopic studies of ocean history and global change
- (2) Future directions in geochemistry using the heavier stable isotopes
- (3) New technologies and new directions in isotope geochemistry

日程：2001年10月14～16日(2泊3日)

14日16時受付開始 17時セミナー開始

16日午後12時頃解散

場所：生産性国際交流センター(神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村)

URL：http://www.jpc-sed.or.jp

会費：学部学生および大学院生12,000円(先着40名，それ以降は一般と同じ扱い)，一般24,000円。会費には宿泊料，食事代，懇親会費が含まれません。

申し込み期間：7月16日～9月10日

申し込み方法：下記ホームページ上で受付中

連絡先：平田岳史(東京工業大学)

URL：http://www.geo.titech.ac.jp/epss/ss 2001/index.htm

2002年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び研究奨励賞候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞(猿橋賞)を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました(研究奨励賞)。賞金と助成金は、本会を母体として新設された、公益信託(1990年3月13日文部省認可)「女性自然科学者研究支援基金」(受託者東洋信託銀行株式会社)から支出されます。つきましては、下記の要領により受賞候補者と奨励賞候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿橋賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50才未満)に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、略歴、主な業績リス

ト、主な論文別刷10編程度、及び推薦者氏名・肩書きを、本会事務所までお送り下さい。

5. 締切は2001年11月30日(必着)。
6. 第22回の賞贈呈式は、2002年5月、東京において行なう予定です。

なお、最近4年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

第18回(1998)千葉大学大学院自然科学研究科教授
西川恵子博士

「超臨界流体の研究」

第19回(1999)東京医科大学助教授 持田澄子博士

「神経伝達物質の放出機構の研究」

第20回(2000)東京大学大学院農学生命科学研究科助
教授 中西友子博士

「植物における水及び微量元素の挙動」

第21回(2001)東京大学大学院理学系研究科助教授
永原裕子博士

「隕石や惑星物質の形成と進化」

研究奨励賞

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者(各締切日において満40才未満)の略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、年月日)、発表論文題目、推薦理由等、及び推薦者氏名・肩書きを記入して、本会事務所までお送りください。
締切は2001年11月末日と、2002年4月末日の2回。

応募先: 女性科学者に明るい未来をの会

〒166 0002 東京都杉並区高円寺北4 29 2 217
Tel: 03 3330 2455 (Fax 兼用)

なお猿橋賞・奨励賞とも、応募のための所定の用紙(推薦書)が本学会(庶務幹事)にありますので下記宛にご請求下さい。

坂田 将

〒305 8567 つくば市東1 1 1中央第7
産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門
Tel: 0298 61 3898, Fax: 0298 61 3666
E-mail: su-sakata@aist.go.jp

平成13年度(第23回)沖縄研究奨励賞 候補者推薦依頼について(学会推薦)

(財)沖縄協会から、標記候補者の推薦依頼が当学会に
来ております。推薦(応募)要領を以下にご案内致し
ます。

1. 目的
沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し、育成することを目的としています。
2. 表彰
受賞者には、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰します。
3. 対象・候補者
沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学、人文科学又は社会科学)を行っている新進研究者(又はグループ)3名以内に贈ります。年齢50歳以下(平成13年7月15日現在)の方で、出身地及び国籍は問いません。
4. 推薦者: 本学会の会長より推薦を行います。
5. 推薦件数
当学会に対する推薦件数の制限はありません。
6. 推薦(応募)手続き
所定の応募用紙を本学会庶務幹事(下記)にご請求いただき、必要事項を記入の上、選考書類(研究論文、研究業績目録等)とともに、庶務幹事宛にお送り下さい。9月17日(助)必着。
坂田 将
〒305 8567 つくば市東1 1 1中央第7
産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門
Tel: 0298 61 3898, Fax: 0298 61 3666
E-mail: su-sakata@aist.go.jp
7. 審査選考など

選考委員会(沖縄協会会長委嘱の委員から構成)にて審査、決定します。受賞者記者発表は平成13年12月10日頃です。贈呈式は平成14年1月17日に、那覇市内のパンフィックホテル沖縄で開催します。受賞者には贈呈式の後、受賞記念講演を行っていただきます。

平成14年度笹川科学研究助成の募集について

(財)日本科学協会から、標記助成募集の案内が学会に
来ております。募集要領の要点は以下のとおりです。

本助成は、若手研究者の育成並びにその研究助成を

目的とし、単年度（平成14年4月1日から平成15年2月10日まで）に成果をとりまとめられる研究課題に対して100万円を限度で助成を行います。対象領域は人文科学、社会科学、および自然科学（医学を除く）、またはそれらの境界領域で、募集対象者は平成14年4月1日現在35歳以下の大学・研究機関等の研究者、大学院生等です。募集締切は平成13年10月31日(水)必着で、申請書を下記宛にお送り下さい。

財団法人日本科学協会
〒107 0052 東京都港区赤坂1 2 2日本財団ビル5階
Tel : 03 6229 5365, Fax 03 6229 5369
E-mail jss@silver.ocn.ne.jp
http://www.jss.or.jp

選考は笹川科学研究助成選考委員会により行われ、助成金の決定は平成14年4月中に通知します。募集要領、申請手続きの詳細については、上記協会ホームページをご参照下さい。

日本地球化学会平成13年名古屋大会 開催予告ならびに研究発表募集要修正

日本地球化学会が協賛する標記講演会について、以下のとおりご案内致します。

1. 期日：平成13年12月3日(月)～12月6日(木)
2. 会場：名古屋大学豊田講堂及びシンポジウム
名古屋市中種区不老町
3. 日程：
講演会等 日程 12月3日(月)～12月5日(水)
総会、個人講演、ポスターセッション
(学生ベストポスターコンテストを含む)
特別講演、懇親会
懇親会 日程 12月4日(火)
会場：名古屋大学生協レストラン
「花の木」
会費：6,000円(予定)
見学会 日程 12月6日(木)
内容：別途アナウンスいたします。

4. 不明の点は学会事務局あるいは下記へお問い合わせ下さい。
〒103 8531 東京都中央区日本橋小網町8 4

日本重化学工業地熱事業部 花野峰行
Tel : 03 3667 6534, Fax : 03 3669 1972
E-mail : hananom@jmc.co.jp

北海道大学大学院地球環境 科学研究科の教官公募について

記

1. 職名および人員：教授 1名
2. 所属：大気海洋圏環境科学専攻化学物質循環講座
3. 研究と教育分野：大気海洋を中心とした物質循環研究を広い視野に立って展開して行く方。
特に、化学物質（放射性同位体、安定同位体を含む）を主な手段として新しい分野を切り開いて研究を進めて行こうとする方が望まれる。また、地球環境科学に関する大学院教育に意欲を持ち、学生の教育や研究指導ができる方。
4. 着任時期：平成14年4月1日以降なるべく早い時期
5. 提出書類（A 4版）：
 - (1) 履歴書
 - (2) 研究業績リスト（査読付き論文とその他を分けて記載）
 - (3) 主要論文の別刷り（5編以内、各2部）
 - (4) 地球環境科学に対する基本姿勢（A 4版1枚）
 - (5) これまでの研究と今後の研究及び教育に関する抱負（A 4版2枚）
6. 応募締切り：平成13年10月29日(月) 必着
7. 書類提出先および問い合わせ先：
書類提出先：
〒060 0810 札幌市北区北10条西5丁目
北海道大学大学院地球環境科学研究科
大気海洋圏環境科学専攻専攻長 山崎孝治
書留送付(封筒の表に「教官応募」と朱書きのこと)
なお、応募書類は返却しない。
Tel : 011 706 2361
E-mail yamazaki@ees.hokudai.ac.jp
問い合わせ先：乗木新一郎
Tel : 011 706 2369
E-mail noriki@ees.hokudai.ac.jp
URL : http://wwwwoa.ees.hokudai.ac.jp
(別紙)
大気海洋圏環境科学専攻の教官構成
[化学物質循環講座]
教授 角皆 静男(平成14年3月退官予定：本公募)

教 授 乗木新一郎（海洋環境化学）

助教授 田中教幸（大気化学）

助教授 〔選考中〕

助 手 成田尚史（海洋化学）

[大循環力学講座]

教 授 久保川 厚（海洋力学・地球流体力学）

教 授 〔選考中〕

助教授 沼口 敦（大気大循環・水・エネルギー循環）

助教授 谷本 陽一（大気海洋相互作用・気候力学）

助 手 水田元太（海洋物理学）

[気候モデリング講座]

教 授 池田元美（海洋物理学）

教 授 山崎孝治（大気大循環・気候力学）

助教授 向川 均（大気力学）

助教授 山中康裕（海洋物質循環・古海洋）

助 手 石渡正樹（気候力学・地球流体力学）

[極域大気海洋学講座（協力講座）]

教 授 若土正暁（極域海洋学・海水変動）

教 授 河村公隆（大気化学・有機地球化学）

教 授 藤吉康志（気象学）

教 授 〔選考中〕

助教授 遠藤辰雄（気象学）

助教授 白澤邦男（海水域の大気海洋相互作用）

助教授 大島慶一郎（海洋物理学）

助教授 中塚武（同位体地球化学）

助 手 深町康（海洋物理学）

助 手 豊田威信（大気海水相互作用）

助 手 川島正行（気象学）

助 手 持田陸宏（地球化学）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2001年11月下旬頃を予定しています。ニュース原稿は10月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

中井俊一

〒113 0032 東京都文京区弥生1 1 1

東京大学地震研究所

Tel : 03 5841 5698 , Fax : 03 5802 3391 ,

E-mail : snakai@eri.u-tokyo.ac.jp

鍵 裕之

〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1

東京大学大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設